

宮城県文化財調査報告書第231集

# 大天馬遺跡

—一般国道4号築館バイパス関連遺跡調査報告書Ⅱ—

平成24年3月

宮城県教育委員会  
国土交通省東北地方整備局

# 大天馬遺跡

—一般国道4号築館バイパス関連遺跡調査報告書Ⅱ—



## 序 文

平成23年3月11日に発生したM9の東北地方太平洋沖地震と巨大津波は、東日本に甚大な被害をもたらしました。

このような地震津波は過去にも例があり、太平洋沿岸を周期的に襲っていることが歴史的に知られていました。特に、平安時代の貞觀11年（869）に起こった陸奥国大地震では、当時の陸奥国府多賀城とその城下に壊滅的な打撃を与えたことが記録されています。

現代に生きる私達は、今回の震災によって、歴史の教訓に如何に学ぶべきか改めて痛感させられるとともに、今後の復興に向けて、この悲惨な経験を無駄にしないように努力することが求められていると言えます。

本書は、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所との協議のもとに、一般国道4号築館バイパス建設工事に先立って実施した栗原市大天馬遺跡の発掘調査報告書です。今回の発掘調査により得られた貴重な成果が、広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後に、震災復興に関わる多忙な業務の中、遺跡の保護に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成24年3月

宮城県教育委員会

教育長 小林伸一



## 例　　言

1. 本書は、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所との協議に基づき実施した一般国道4号築館バイパス建設に伴う大天馬遺跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。

3. 発掘調査および資料整理・報告書の作成に関しては、以下の方々および機関からご指導・ご協力を賜った（敬称略）。

《個人》千葉長彦・大場亜弥・安達訓仁・三浦実（栗原市教育委員会）

《機関》栗原市教育委員会

4. 本書の第1図は、国土地理院発行の1/25000地形図「金成」「築館」を複製して使用した。

5. 本書における土色の記述に当たっては、「新版標準土色帖 1994年版」（小山・竹原 1994）を使用した。

6. 測量基準点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標X系による。なお使用した測量基準点は、以下の通りである。

TA 2 : X = -140020.712 Y = 17752.464 TR 6 : X = -140113.530 Y = 17799.967

TR 7 : X = -140036.586 Y = 17810.892 TR 8 : X = -139981.850 Y = 17816.779

7. 本書で使用した遺構記号は、以下の通りである。

SI：竪穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SE：井戸跡 SK：土坑 SD：溝跡

P：ピット・小柱穴

8. 遺構平面図・断面図にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下の通りである。

調査区配置図：1/1000 遺構配置図：1/400 溝跡平面図：1/100 断面図 1/60

竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・土坑平面図・断面図：1/60

9. 遺物図版にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下の通りである。

土器類：1/3 石製品：1/2

10. 土器の説明では、製作においてロクロを使用しているものを「ロクロ調整」、ロクロを使用していないものを「非ロクロ調整」と表記する。

11. 土器実測図のうち、土師器外面・内面にグレー塗り表示してあるものは、外面・内面が黒色処理されていることを示す。

12. 本文中で使用した「灰白色火山灰」は、10世紀前葉頃に降下したものと考えられている（白鳥1980、井上・山田1990）。

13. 遺物の写真撮影は、株式会社アートプロフィールに委託して行った。

14. 遺構・遺物の整理は、豊村幸宏、浅野明美、岸柳あきら、與名本京子が行った。

15. 本書の執筆・編集は、調査担当者との協議のうちに豊村幸宏が行った。

16. 発掘調査の記録や出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。

## 調査要項

遺跡名：大天馬遺跡（宮城県遺跡地名表登録番号 49023）

遺跡記号：RW

所在地：宮城県栗原市志波姫堀口大天馬

遺跡種別：古代の散布地

調査原因：一般国道4号築館バイパス建設工事

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査協力：国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所 栗原市教育委員会

調査面積：平成21年度発掘調査 対象面積 約6,500m<sup>2</sup> 調査面積 約1,600m<sup>2</sup>

平成23年度発掘調査 対象面積 約3,500m<sup>2</sup> 調査面積 約3,300m<sup>2</sup>

調査期間：平成21年度発掘調査 平成21年5月25日～平成21年6月3日

平成23年度発掘調査 平成23年7月19日～平成23年10月11日

調査員：平成21年度発掘調査

　　豊村幸宏・尾形祐之・古田和誠

平成23年度発掘調査

　　天野順陽・豊村幸宏・山中信宏・鈴木啓司・三浦秋司

# 目 次

序文

例言

調査要項

## I 遺跡の概要

1. 遺跡の位置と地理的環境	1
2. 周辺の遺跡	1

## II 調査に至る経緯と調査経過

1. 調査に至る経緯	3
2. 調査経過	5

## III 調査方法と基本層序

1. 調査方法	6
2. 基本層序	6

## IV 発見された遺構と遺物

1. 壇穴住居跡	8
2. 掘立柱建物跡	18
3. 井戸跡	19
4. 土坑	19
5. 溝跡	21

## V 総括

1. 遺物について	27
(1) S I 6 壇穴住居跡出土土器	27
(2) S I 7 壇穴住居跡出土土器	29
(3) SK 1 5 土坑出土土器	29
2. 遺構について	30
(1) 壇穴住居跡の年代について	30
(2) 壇穴住居跡の構造について	30
(3) 集落の様相について	31
3. まとめ	33

引用・参考文献 ..... 35

写真図版 ..... 37

報告書抄録

## 挿図目次

第1図 大天馬遺跡と周辺の遺跡	2	第12図 SB8 挖立柱建物跡平面図・断面図	18
第2図 調査区配置図	4	第13図 SE3 井戸跡平面図・断面図	19
第3図 基本層序柱状図	6	第14図 SK4・12・13・14 土坑平面図・断面図	20
第4図 A区・B区・C区東半部遺構配置図	7	第15図 SK15・16 土坑平面図・断面図	22
第5図 B区・C区遺構配置図	9	第16図 SK15 土坑出土土器	22
第6図 SI5 壺穴住居跡平面図・断面図	10	第17図 SD1・2 溝跡平面図・断面図	23
第7図 SI6 壺穴住居跡平面図・断面図	12	第18図 SD9 溝跡平面図・断面図	24
第8図 SI6 壺穴住居跡出土土器	13	第19図 SD10・11 溝跡平面図・断面図	26
第9図 SI6 壺穴住居跡出土土器・石製品	14	第20図 須恵器坏の比較	28
第10図 SI7 壺穴住居跡平面図・断面図	16	第21図 壺穴住居跡の分布状況	32
第11図 SI7 壺穴住居跡出土土器	17		

## 表目次

第1表 壺穴住居跡属性表	31
--------------	----

## 写真図版目次

図版1 調査区空撮(1)	39	図版9 SB8 挖立柱建物跡	47
図版2 調査区空撮(2)	40	図版10 SE3 井戸跡・SK4・12 土坑	48
図版3 A区・C区全景	41	図版11 SK13・14・15・16 土坑	49
図版4 C区全景・SI5 壺穴住居跡	42	図版12 SD1・2・9・10・11 溝跡	50
図版5 SI6 壺穴住居跡(1)	43	図版13 SI6 壺穴住居跡出土土器	51
図版6 SI6 壺穴住居跡(2)	44	図版14 SI6・7 壺穴住居跡・SK15 土坑出土土器・ 石製品	52
図版7 SI7 壺穴住居跡(1)	45		
図版8 SI7 壺穴住居跡(2)	46		

# I 遺跡の概要

## 1. 遺跡の位置と地理的環境

大天馬遺跡は、栗原市志波姫堀口大天馬に所在する。

栗原市は、旧築館町ほか9町村が平成17年4月1日に広域合併して誕生した宮城県北西部を占める新しい市である。市の中心部は、奥州街道沿いにあたる旧築館町で、遺跡はこの旧築館町の市街中心部から北東に約1.7kmほど離れた地点に位置している。

地形的に見ると、本遺跡の周辺一帯には、奥羽山脈から樹枝状に派生して延びる陸前丘陵の一部である築館丘陵とそれにつながる迫川低地が広がっている。この築館丘陵は、一迫川、二迫川、三迫川によって複雑に開析されており、この開析の結果生じた段丘の平坦部と縁辺部に本遺跡は立地している。段丘と迫川低地との比高は、約10～20mあり、段丘北側は、西から沢が入り込み急傾斜面となっている。また、段丘中央部には、後沢の地名が示すとおり北西から南東にかけて流出していた沢地形が認められる。

遺跡範囲は、東西約450m、南北約250～300mで、調査対象範囲はこの中の西半部に当たり、現況は、宅地、水田、畠地、荒蕪地、竹林、林地となっている。

## 2. 周辺の遺跡

本遺跡の周辺には、旧石器時代から近世に至る多数の遺跡が存在しており、なかでも縄文時代と奈良・平安時代の遺跡の分布が濃密である。

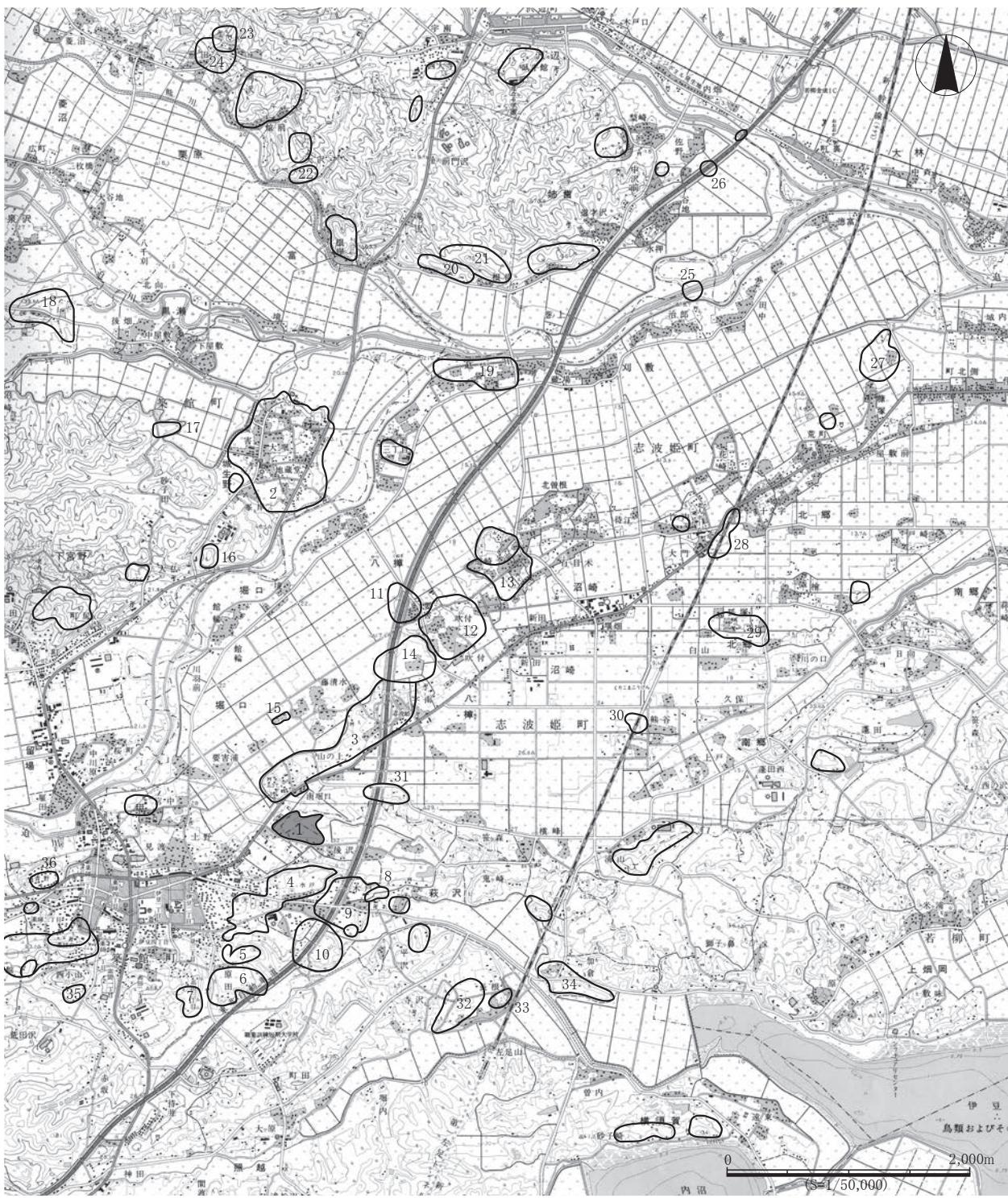
旧石器時代の遺跡としては、伊治城跡（築館町教育委員会2004）、淀遺跡（宮城県教育委員会2001）がある。いずれも後期旧石器時代の剥片が出土している。

縄文時代の遺跡としては、嘉倉貝塚（築館町教育委員会2002・2003、宮城県教育委員会2002）、鰐沢遺跡（築館町教育委員会2005）、佐内屋敷遺跡（宮城県教育委員会1983）、木戸遺跡（宮城県教育委員会1980d）、原田遺跡（宮城県教育委員会1980b・2009）、宇南遺跡（宮城県教育委員会1979・1980f）などがある。このうち嘉倉貝塚では縄文時代前期後葉～晚期後葉にかけての遺構・遺物が検出され、前期後葉から中期初頭の環状集落の様相が明らかとなっている。また、鰐沢遺跡では縄文時代中期末の複式炉を伴う竪穴住居跡が発見された他、佐内屋敷遺跡、木戸遺跡、原田遺跡では縄文時代中期中葉の竪穴住居跡が検出され、宇南遺跡では縄文時代晚期の遺構・遺物が確認されている。

弥生時代の遺跡としては、宇南遺跡が知られており、弥生時代後期の遺物が出土している。

古墳時代では、伊治城跡（築館町教育委員会1990・1992、栗原市教育委員会2009）で古墳時代前期の居館区画溝跡や古墳周溝が確認されている他、鶴ノ丸遺跡（宮城県教育委員会1981）では古墳時代前期の方形周溝墓・円形周溝墓が調査されている。また、古墳としては大仏古墳群（築館町史編纂委員会1976、宮城県教育委員会1998）があげられる。

奈良・平安時代に入ると、再び遺跡数は増加する。特筆すべきものとして、本遺跡の北約3kmに位置する伊治城跡（宮城県多賀城跡調査研究所1878～1980、築館町教育委員会1988～2002・2004・2005、栗原市教育委員会2006～2010）が挙げられる。伊治城跡は、「続日本紀」の神護景雲元年（767）に律令政府が古代東北経営のために造営した城柵の一つで、正殿、前殿、北殿、脇殿が規則的に配置



No.	遺跡名	立地	種別	時 代	No.	遺跡名	立地	種別	時 代
1	大天馬遺跡	段丘	散布地	古代	19	刈敷袋遺跡	自然堤防	散布地	縄文・古代
2	伊治城跡	段丘	古墳・居館・集落・城柵	旧石器・古墳前・中・奈良・平安・中世	20	姉歯横穴墓群	丘陵斜面	横穴墓	古墳後
3	御駒堂遺跡	段丘	集落	縄文・弥生・古墳～近世	21	上館跡	丘陵	城館	平安
4	下萩沢遺跡	丘陵	集落	縄文中・弥生・古代	22	大沢横穴墓群	丘陵斜面	横穴墓	古墳後・古代
5	源光遺跡	丘陵	散布地	縄文中・古代・近世	23	栗原寺跡	丘陵	寺院	古代・中世
6	原田遺跡	丘陵	集落	縄文中・古代	24	尾松遺跡	丘陵	散布地	古代
7	高田山遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代	25	刈敷治郎遺跡	自然堤防	散布地	縄文中・晚・古代
8	鰐沢遺跡	丘陵	集落	縄文後・古代・中世	26	佐野遺跡	丘陵	集落	弥生・古代
9	木戸遺跡	丘陵	集落	縄文中・古代	27	糠塚遺跡	段丘	集落	弥生・奈良・平安
10	佐内屋敷遺跡	丘陵	集落	縄文中・弥生・奈良・平安	28	大門遺跡	段丘	集落	縄文・奈良・平安・中世
11	鶴ノ丸遺跡	段丘	城館・集落	縄文晩・弥生～近世	29	狐塚遺跡	段丘	竪跡	古代
12	吹付遺跡	段丘	集落	古代	30	熊谷遺跡	段丘	集落	縄文・古代
13	淀遺跡	丘陵	散布地・集落	旧石器・古墳・奈良・平安・中世	31	山ノ上遺跡	丘陵	集落	縄文・古代
14	宇南遺跡	段丘	城館・集落	縄文前・晚・弥生～近世	32	照越台遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文中～晚・古墳・古代
15	堂の沢遺跡	段丘	散布地	古代	33	玉萩台遺跡	丘陵	散布地	縄文中～晚・古代
16	大仏塚群	丘陵斜面	円墳	古墳後・古代	34	嘉倉貝塚	丘陵	貝塚	縄文前～晚・弥生・古代
17	堀切長根遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代	35	小山遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代
18	長者原遺跡	丘陵	集落	古墳前・中・奈良・平安	36	青野遺跡	段丘	散布地	古代

第1図 大天馬遺跡と周辺の遺跡

された政府とそれを取り囲む内郭、外郭からなる三重構造を持つことが判明し、国内初となる弩の「機」が出土したことでも著名である。集落跡には、木戸遺跡、佐内屋敷遺跡、原田遺跡、下萩沢遺跡（宮城県教育委員会 2009）、御駒堂遺跡（宮城県教育委員会 1982）、山ノ上遺跡（宮城県教育委員会 1980e）、宇南遺跡、鶴ノ丸遺跡、吹付遺跡（宮城県教育委員会 2005a）、淀遺跡、糠塚遺跡（宮城県教育委員会 1978）、大門遺跡（宮城県教育委員会 1980a）、佐野遺跡（宮城県教育委員会 1980c）、長者原遺跡（栗駒町教育委員会 1995）などがある。このうち御駒堂遺跡は、7世紀末～9世紀初めの集落跡で、8世紀前半に関東地方から多数の人々が移住してきたことを示す土器類や堅穴住居のカマド構造が確認されており、伊治城成立以前の律令政府による古代栗原郡の建郡政策を解明する上で大きな手掛かりとなるものとされている。一方、原田遺跡、下萩沢遺跡では伊治城存続期と同時期の掘立柱建物跡、堅穴住居跡が、区画施設を伴って発見されており、住居内からは鉄製の武器類が出土している。

生産遺跡には、須恵器を焼成した岩ノ沢窯跡や狐塚遺跡、須恵器と瓦を併焼した小迫神社窯跡があり、これらの窯跡の製品には伊治城に供給されていたものが含まれる。墳墓としては、二迫川左岸の丘陵上に 44 基の円墳からなる鳥矢ヶ崎古墳群（栗駒町教育委員会 1972）がある。昭和 46 年に、このうちの 2 基が調査され、2 号墳の組合せ木棺内および覆土から青銅製鎧帶金具や蕨手刀などが出土している。また、二迫川の北側丘陵部の南斜面では、大沢横穴墓群と姉歯横穴墓群が確認されており、これらは本州の内陸部に位置する横穴墓として最北のものとされている。

中世の遺跡については、木戸遺跡で壁沿いに柱穴をもつ堅穴遺構が検出されている。また、鶴ノ丸遺跡では鎌倉時代後期～江戸時代の館跡が発見され、このほかにも照越館跡、萩沢城跡、嘉倉館跡などが知られている。

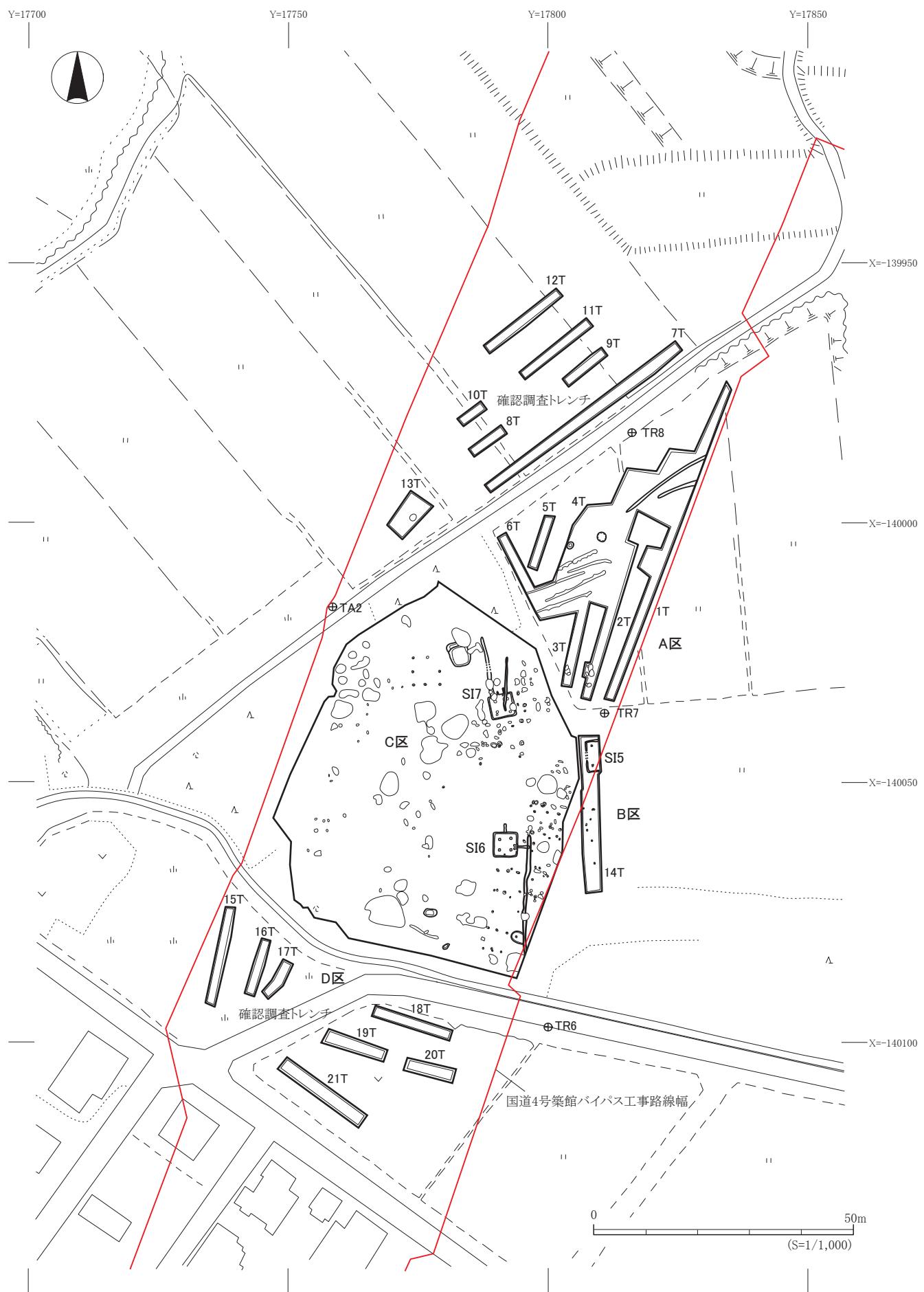
近世の遺跡としては、御駒堂遺跡で掘立柱建物跡が確認されている他、鶴ノ丸遺跡、宇南遺跡でも当該期の遺構・遺物が検出されている。

## II 調査に至る経緯と調査経過

### 1. 調査に至る経緯

旧築館町内を縦断する国道 4 号線の交通混雑の緩和と市街地周辺部の活性化等の理由により、旧築館町赤坂から、市街地を東側に迂回し旧築館町城生野に至る総延長約 7km、路線幅 50m、両側 4 車線の一般国道 4 号築館バイパスの建設計画が立案され、昭和 56 年都市計画決定された。

平成 14 年 6 月、宮城県教育委員会は、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所に対し、計画地内に周知の遺跡が存在することと未発見の遺跡が存在する可能性が高いことから、遺跡の取り扱いについての協議を申し入れ、同年 9 月、遺跡分布調査並びに試掘調査を実施した。この結果、古代の堅穴住居跡や土器が発見された下萩沢遺跡、中世以降と考えられる塚が確認された源光遺跡、古代の土器の散布が認められた大天馬遺跡、堂の沢遺跡が遺跡台帳に新規登録されることとなった。このことを受けて、事業主体である国土交通省東北地方整備局と保存協議を行い、計画変更により保存可能な源光遺跡の塚以外については、路線の変更が困難であることから、やむを得ず建設工事前



第2図 調査区配置図

に記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

計画地内での確認・事前調査は、平成15・16年と平成19年に高田山遺跡、源光遺跡、原田遺跡、下萩沢遺跡で順次実施され、旧築館町赤坂から下萩沢に至る約1.2kmの区間については、平成19年以降暫定的にバイパスの供用が開始されている。ただし、大天馬遺跡より北側のバイパス延伸部分には、御駒堂遺跡、伊治城跡といった重要遺跡が位置しているため、今後、関係機関で協議を行なながら事業を進めていくこととしている。

こうした中にあって、大天馬遺跡に関わる路線敷地内の用地買収の目処が立ち、地権者の了解が得られたことから、本遺跡の確認・事前調査を実施する運びとなった。なお、対象地内に居住する地権者の住居の移転が必要なため、平成21年度については、地権者の住居部分を除いた北側と東側の旧水田耕作地と西側の荒蕪地部分を調査（第1次調査）し、平成23年度には、移転完了後の住居の敷地部分を調査（第2次調査）することとした。

## 2. 調査経過

平成21年度は、調査対象区域の北半部（A区・B区）と南西部（D区）で第1次調査を実施した。調査地点では、近現代における農地改良により旧地形が改変を受け、削平の著しい箇所も見受けられることから、A区で13本、B区で1本、D区で3本のトレーニチを設定し、遺構の検出状況により、適宜トレーニチを拡張し本発掘調査に移行することとした。

調査は、平成21年5月25日から開始した。A区の1トレーニチから4トレーニチでは、井戸跡1基、土坑1基、溝跡2条が確認された。B区の14トレーニチでは、奈良時代の竪穴住居跡1軒のほか、ピット10個が検出された。竪穴住居跡については、開田工事のため床面下まで削平され、遺存状況は良くなかった。A区の5トレーニチから13トレーニチでは、遺構・遺物は発見されなかった。

D区の15トレーニチから17トレーニチでは、旧流路が調査箇所全域に及んでいることが明らかとなり、遺構・遺物は発見されなかった。

第1次調査のすべてが終了したのは、平成21年6月3日である。

なお、平成22年9月10日にD区の18トレーニチから21トレーニチで実施した確認調査においても、旧流路の一部が発見されたのみで、遺構・遺物は検出されなかった。

第2次調査は、調査区内に位置する民家の解体・撤去が終了したのを受けて、調査対象区域中央部のC区において、平成23年7月19日から開始した。調査区内には、全体に、民家の建物基礎、埋設管、倒木痕などの攪乱が及んでいた。遺構の分布は散在的で、調査区の東半部においてのみ認められ、攪乱のため遺存状況の悪いものが見られる。発見された遺構は、奈良時代の竪穴住居跡2軒、時期不明の掘立柱建物跡1棟、土坑5基、溝跡3条、ピット61個である。遺構の全容が明らかとなった9月13日には、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。第2次調査のすべてが終了し、調査区内の埋め戻しが完了したのは、平成23年10月11日である。

### III 調査方法と基本層序

#### 1. 調査方法

調査対象地は、概ね平坦であるが、北側には急傾斜面がある。このため平坦面では、計画道路に沿って南北方向に、傾斜面では、等高線とほぼ平行となるように北東から南西方向にトレンチを設定した。表土排除は、 $0.45\text{ m}^3$ のバックホーにより実施した。この後、遺構確認面である地山のⅢ層上面で人力による遺構検出作業を行った。検出した遺構は、段下げをし平面形を確定したのち、断面精査を経て、井戸跡を除いてすべて完掘している。

遺構の平面実測は、計画道路のセンター杭と幅杭を基準とし、トータルステーション及び電子平板を用いて行い（基準とした座標値は例言を参照のこと）、遺構の断面実測は、縮尺 $1/20$ の手実測で行った。また、遺構の記録写真は、1800万画素の $35\text{mm}$ 一眼レフデジタルカメラで撮影した。

#### 2. 基本層序

調査箇所は、標高 $30\sim33\text{m}$ ほどの段丘上とその北側の急傾斜地に位置している。現況は、宅地、水田、畑地として利用されているほか、一部は、荒蕪地、竹林、林地となっている。近年に行われた宅地や農地の造成に際して段丘面が削平され、地形的な改変を受けており、沢地を埋め立てて水田としている箇所がある。調査地点における層序は、概ね以下のとおりである。

I a 層：黒褐色（10YR3/2）シルト。B区北東部およびC区西半部に見られる近現代の盛土整地層。

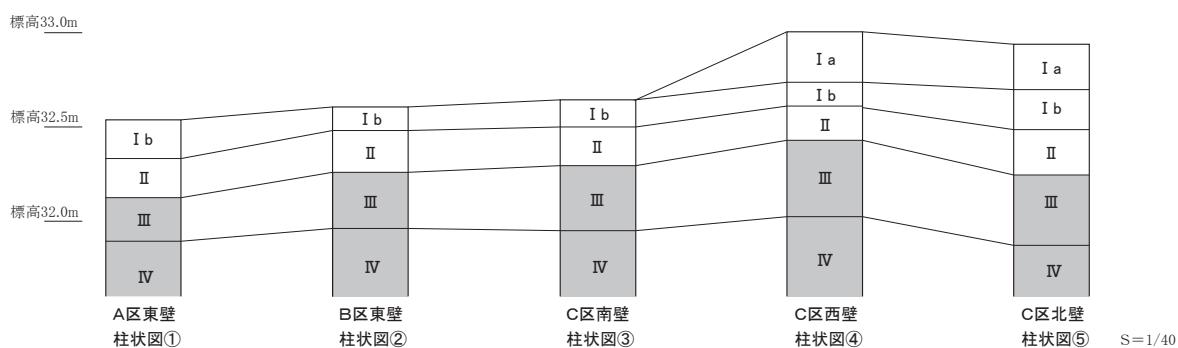
層上面の標高 $32.7\sim33.0\text{ m}$ 。層厚 $0.2\sim0.3\text{ m}$ 。

I b 層：黒褐色（10YR3/2）粘土質シルト。調査区内全域に見られる旧耕作土。層上面の標高 $32.5\sim32.8\text{ m}$ 。層厚 $0.1\sim0.2\text{ m}$ 。

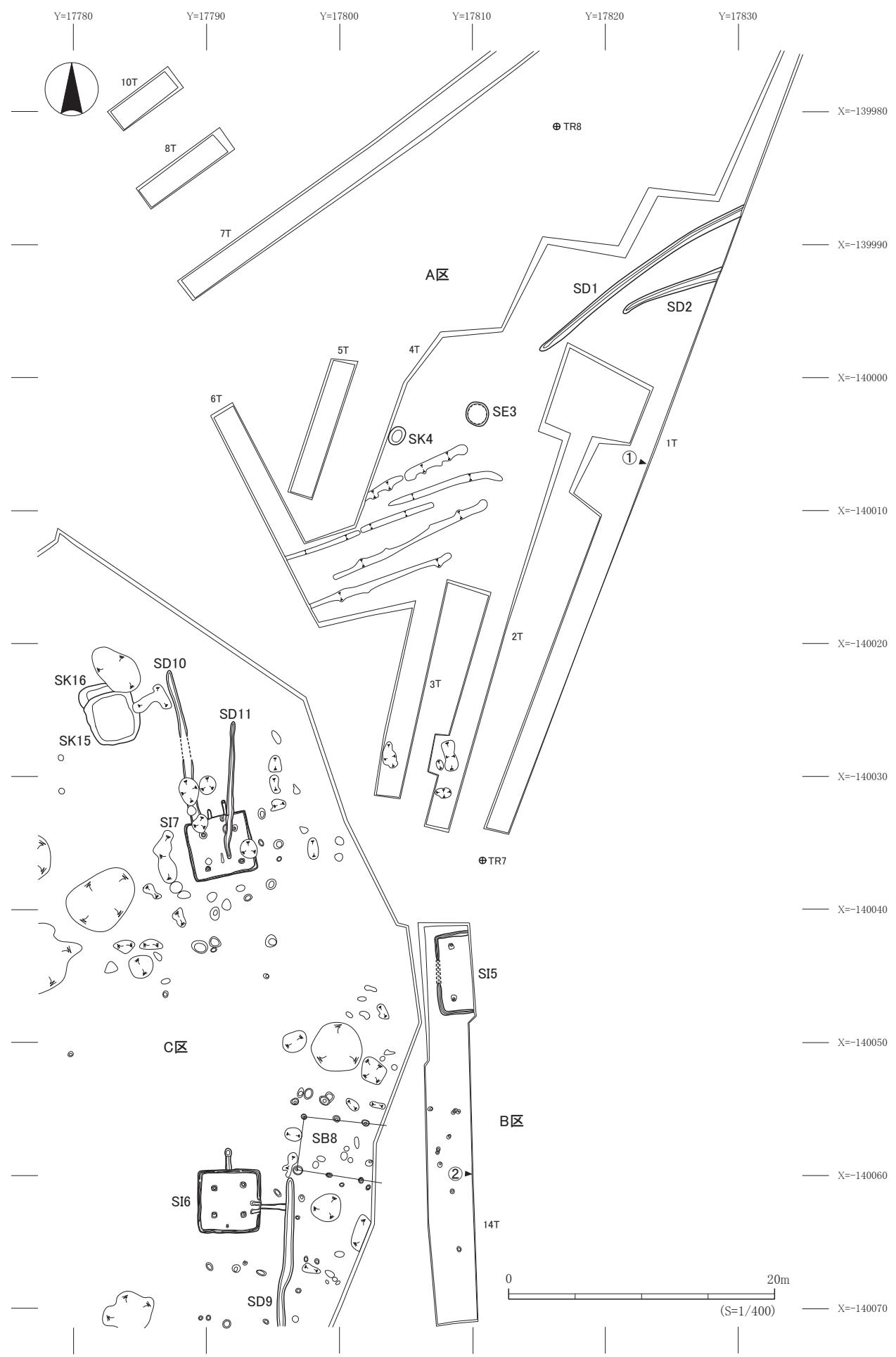
II 層：黒褐色（10YR3/2～10YR2/2）粘土質シルト。調査区内全域に見られる旧表土層。層上面の標高 $32.3\sim32.6\text{ m}$ 。層厚 $0.15\sim0.25\text{ m}$ 。

III 層：黄褐色（10YR5/6）粘土質シルト～明黄褐色（10YR6/6）粘土。調査区内全域に見られる地山のローム層。層上面が遺構確認面。下層にいくにしたがって、漸移的に粘土質シルトから粘土に土性が変化する。層上面の標高 $32.0\sim32.4\text{ m}$ 。層厚 $0.2\sim0.4\text{ m}$ 。

IV 層：明黄褐色（10YR7/6）粘土。調査区内全域に見られる地山のローム層。層上面の標高 $31.7\sim32.0\text{ m}$ 。層厚 $0.4\text{ m}$ 以上。なお、IV層より下層には、古代の竪穴住居跡カマド構築材に使用された灰白色（2.5Y8/2）粘土の堆積層が、部分的に見られる。



第3図 基本層序柱状図



第4図 A区・B区・C区東半部遺構配置図

## IV 発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構は、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡1軒、井戸跡1基、土坑6基、溝跡3条、ピット71個である（第4・5図）。S I 6 竪穴住居跡の遺存状況は、比較的良好であるが、S I 7 竪穴住居跡は攪乱により一部壊され、S I 5 竪穴住居跡は、開田のため、壁や床面、掘方の一部が削平されており遺存状況はよくない。

掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝跡、ピットの所属年代は、いずれも古代以降とみられるものの、遺構に直接伴う遺物が出土していないため、詳しい時期は不明である。

遺物は、整理用テンバコで3箱分出土している。その大半が、S I 6・S I 7 竪穴住居跡からの出土で、非クロクロ調整の土師器が主体を占め、須恵器を少量含み、関東系土師器が極僅かに混じる。この他に、土坑、溝跡、ピットから、非クロクロ調整の土師器、須恵器が出土している。また、表土および遺構確認面から非クロクロ調整の土師器、近世陶器、砥石、古寛永通寶が出土している。

### 1. 竪穴住居跡

#### 【SI5 竪穴住居跡】（第4～6図 図版4）

B区北側に位置する。地山面で検出した。他の遺構との重複関係はない。遺構の東半部は、調査区外に延びている。近年に行われた農地改良工事のため床面下まで削平を受けており、遺構の残存状況は、極めて悪い。

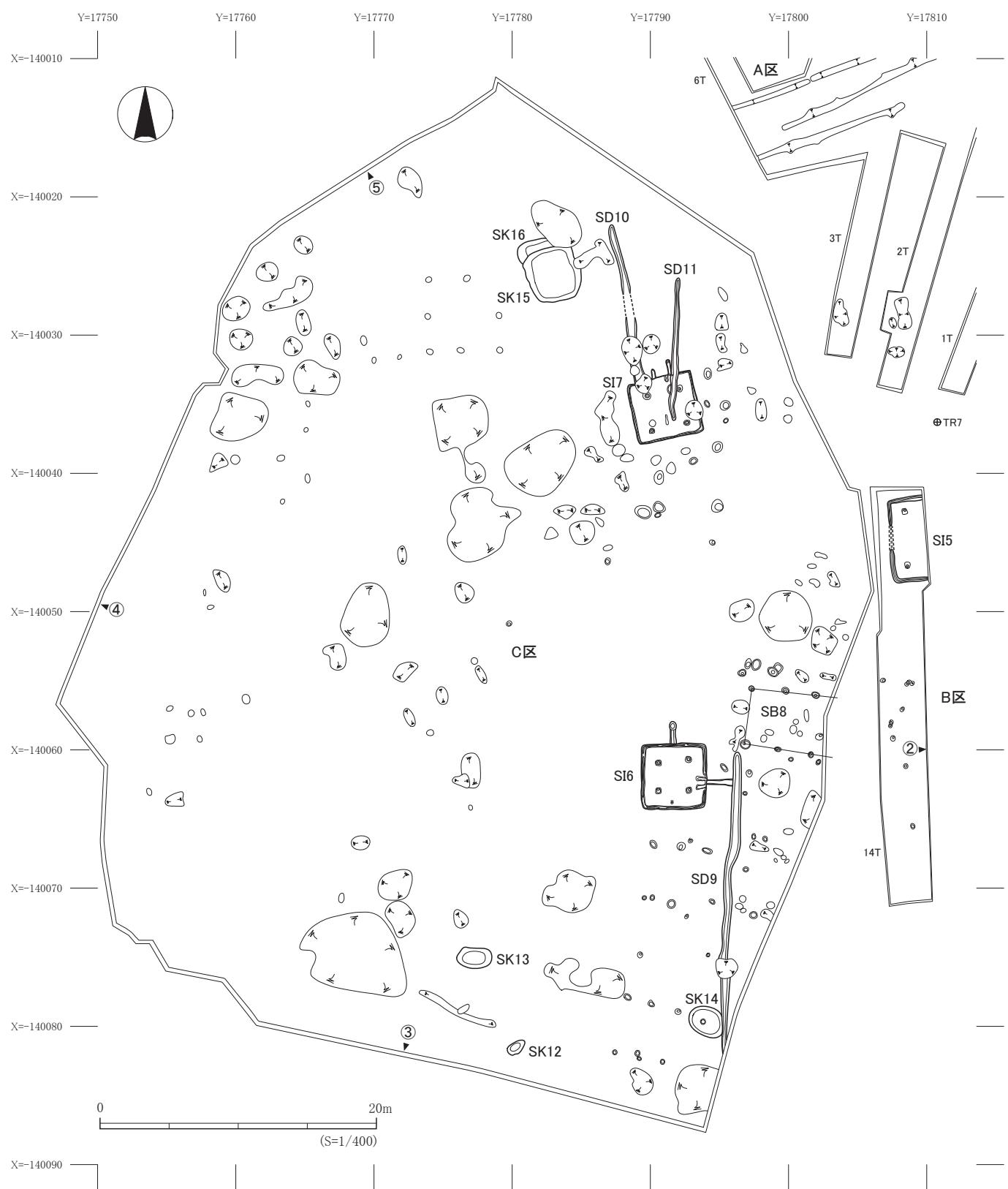
平面規模は、東西が北辺2.60m以上、南辺2.70m以上、南北が西辺5.90mで、平面形は、隅丸方形と推定される。壁は、残存していない。方向は、西辺でみると北で西に約5° 傾いている。床面、壁柱穴、カマド、貯蔵穴は検出されなかった。ただし、調査区東壁の住居北壁中央付近にあたる箇所で、多量の焼土塊や炭化物ブロックが認められていることから、カマド燃焼部が、この部分にあったものとみられる。

主柱穴は、西辺に沿った北西及び南西で2個検出されている（P1・P2）。主柱穴の規模は、一辺が0.30～0.40mの方形を呈し、柱材はいずれも切り取られている。柱痕跡は、直径0.15mの円形で、柱間寸法は、4.00mである。柱穴の掘方埋土は、地山ブロックを含む黒褐色シルト、柱痕跡の堆積土は、黒褐色粘土質シルトである。切取穴の堆積土は、地山ブロックを多量に含む黒褐色シルトで、人為的埋土である。

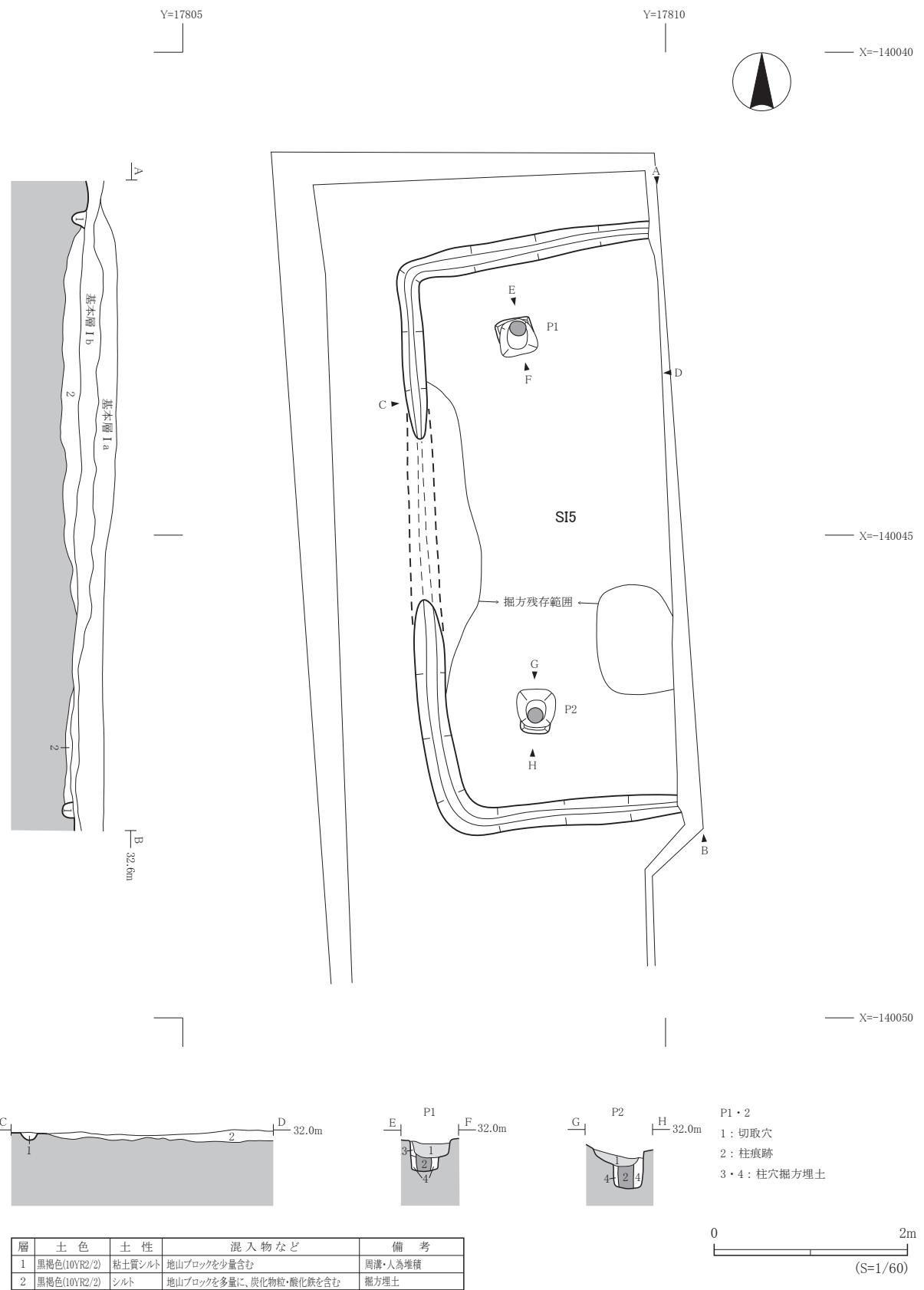
周溝は、北辺から西辺、南辺にかけて検出されているが、西辺中央部では、長さ1.60mに渡って削平され途切れている。規模は、上幅0.20～0.50m、下幅0.05～0.15m、深さ0.10～0.15m、断面形は、U字状である。堆積土は、地山ブロックを少量含む黒褐色粘土質シルトで、人為的埋土である。

掘方は、西辺中央部と調査区東壁際では、削平のため一部未検出である。残存している深さは、0.05～0.20mで、底面には凹凸が見られる。掘方埋土は、地山ブロックを多量に含む黒褐色シルトである。

遺物は、掘方埋土から非クロクロ調整の土師器長胴甕口縁部・底部片が出土している。小片のため図示できなかった。外面調整は、口縁部ヨコナデ、体部手持ちヘラケズリ、内面調整が、口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ後ヘラミガキで、底部外面はナデである。



第5図 B区・C区遺構配置図



第6図 SI5竪穴住居跡平面図・断面図

### 【SI6 壁穴住居跡】（第4・5・7～9図 図版5・6・13・14）

C区中央東側に位置する。地山面で検出した。SD9溝跡と重複し、これより古い。遺構の残存状況は、比較的良好である。

平面規模は、東西が北辺4.60m、南辺4.40m、南北が東辺4.60m、西辺4.60mで、平面形は、方形である。壁は、残りの最も良い南壁で床面から0.37m残存し、やや外側に開いて立ち上がる。方向は、西辺でみると北で東に約1°偏している。

床面は、概ね平坦で、掘方埋土上面を床としている。

主柱穴は、住居平面形対角線上に4個が確認されている(P1～P4)。平面形は、一辺0.30～0.45mの方形、隅丸方形で、深さは、0.20～0.35mである。柱痕跡は、直径0.14～0.18mの円形で、柱間寸法は、P1～P2間が2.20m、P2～P3間が2.30m、P3～P4間が1.90m、P4～P1間が2.20mである。柱穴の掘方埋土は、地山ブロックを含む黒褐色、にぶい黄褐色粘土質シルト、柱痕跡の堆積土は、地山粒を含む黒褐色シルトである。

カマドは、新旧2時期に分けられ、北壁中央部の旧カマドから東壁中央南寄りの新カマドに造り替えられている。

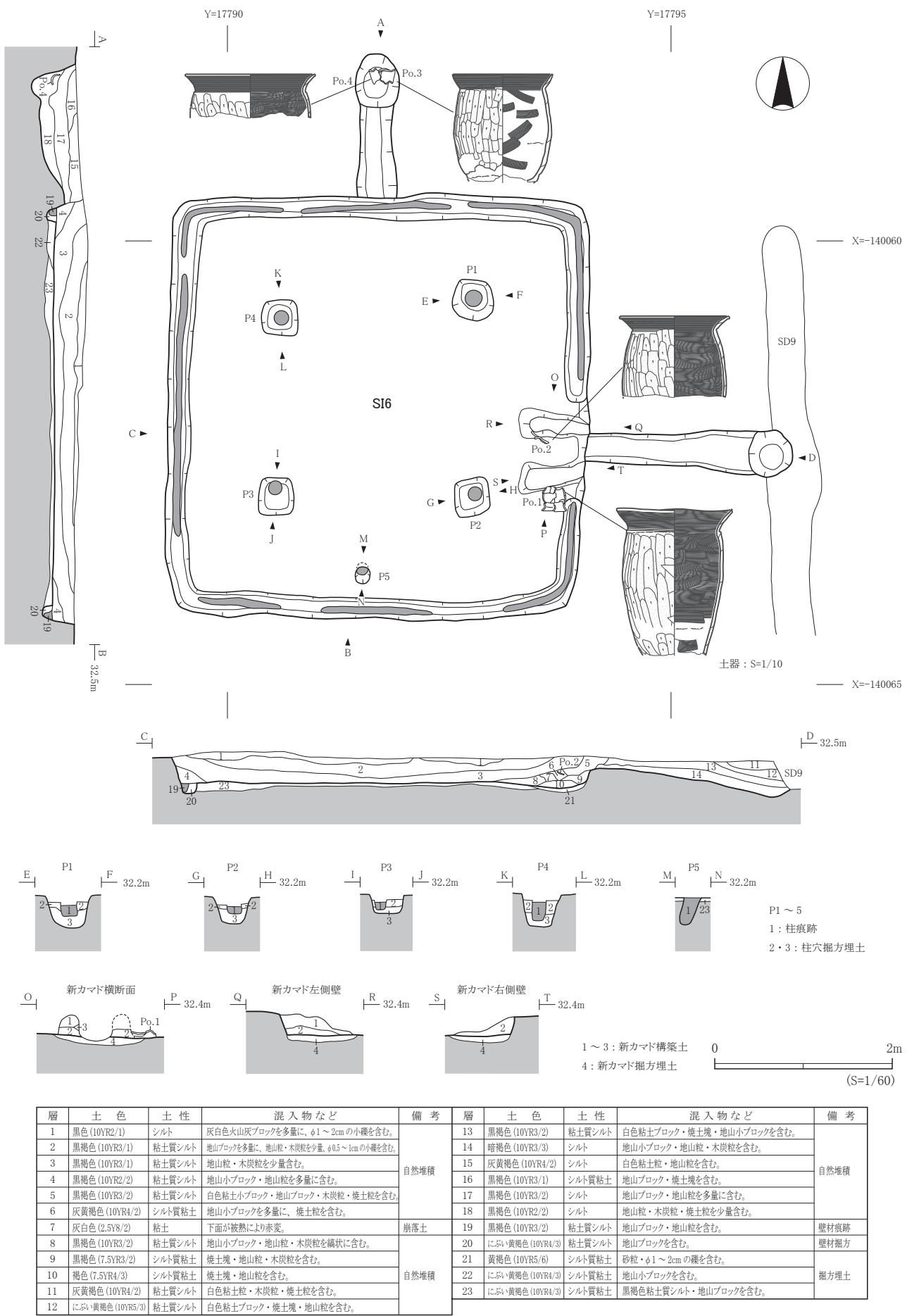
旧カマドは、煙道と煙出しピットのみ残存している。煙道は、住居北壁より1.60m北側に延び、その先端に煙出しピットが掘りこまれている。煙道底面は、煙出しピットに向かって低く傾斜している。煙出しピットは、長径0.60m、短径0.50mの楕円形を呈し、深さは、0.50mで、煙道の底面から0.12m掘り窪められている。煙道と煙出しピットには白色粘土小ブロックを含む灰黄褐色シルト、地山ブロック、焼土塊、焼土粒、木炭粒を含む黒褐色シルト質粘土・シルトが自然堆積している。

新カマドは、カマドの両側壁、煙道、煙出しピットが残存している。燃焼部は、幅0.25m、奥行き0.65mである。カマド本体は、カマド掘方上面に白色粘土を積み上げて構築している。右側壁は、長さ0.75m、幅0.35m、高さ0.20m、左側壁は、長さ0.80m、幅0.35m、高さ0.25m残存している。左右の側壁間の幅は、1.00mである。燃焼部内の堆積土は、地山小ブロック、焼土粒、木炭粒を含む黒褐色粘土質シルト・シルト質粘土、褐色シルト質粘土、灰黄褐色シルト質粘土、カマド構築材の崩落土である白色粘土である。

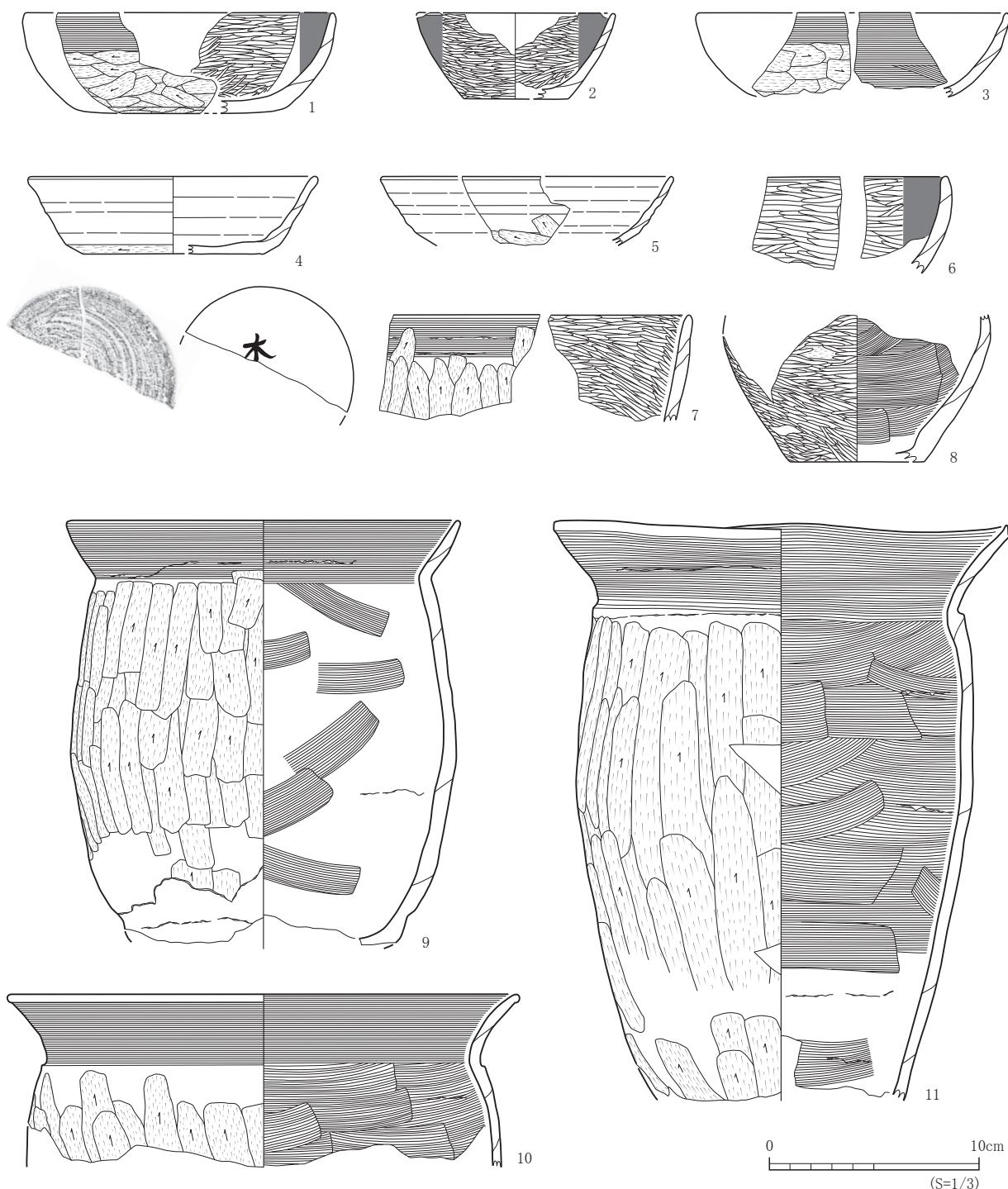
煙道は、カマド奥壁より2.30m東側に延び、その先端に煙出しピットが掘り込まれている。煙道底面は、煙出しピットに向かって緩やかに低く傾斜している。煙出しピットは、径0.50mの円形を呈し、深さは、0.40mである。煙道と煙出しピットには白色粘土ブロック、地山小ブロック、焼土塊、焼土粒、木炭粒を含む灰黄褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色粘土質シルト、黒褐色粘土質シルト、暗褐色シルトが自然堆積している。

周溝は、東辺の新カマド部分で途切れる以外は壁際を全周し、内部には壁に沿って壁材痕跡が検出されていることから、壁材の据方と考えられる。規模は、上幅0.18～0.30m、下幅0.09～0.20m、深さ0.10～0.15m、断面形は、逆台形である。埋土は、地山ブロックを含むにぶい黄褐色粘土質シルトである。壁材痕跡は、幅0.05～0.08m、深さ0.09mで、堆積土は、地山粒を含む黒褐色粘土質シルトである。

この他、南辺中央部の壁際床面で径0.18m、深さ0.30mの円形のピットを検出している(P5)。壁に向かって斜めに傾斜していることと、掘方を伴わず柱痕跡のみ検出されていることから、直接床面に打ち込まれたものと考えられ、住居の入り口部分に設けられた一本梯子に伴うピットとみられる。堆積土は、

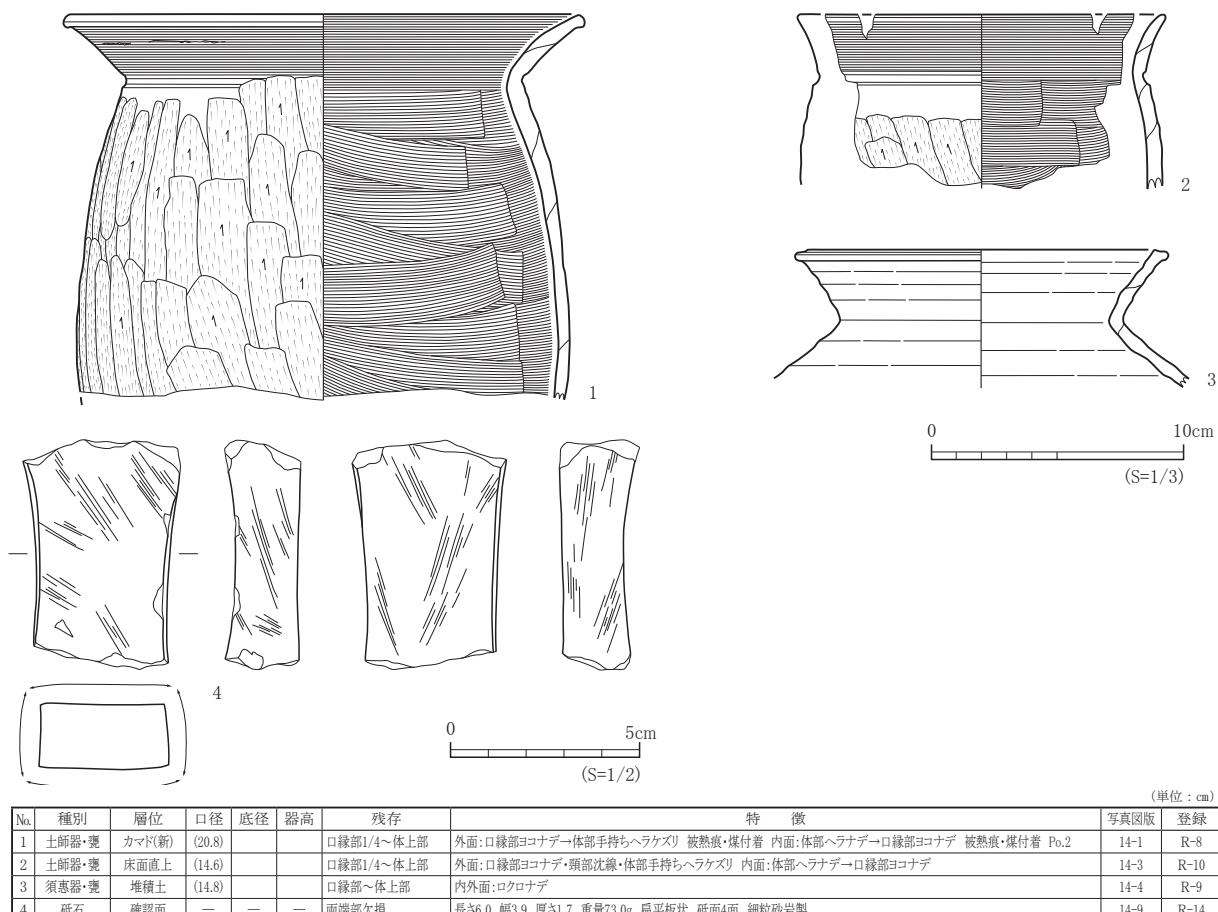


第7図 SI6堅穴住居跡平面図・断面図



No.	種別	層位	口径	底径	器高	残存	特徴		写真図版	登録
							外面:口縁部ヨコナデ→体部・底部手持ちヘラケズリ 内面:ヘラミガキ・黒色処理 被熱により黒色消失	内面:ヨコナデ・開東系土師器		
1	土師器・壺	床面直上	(15.0)	(9.8)	4.8	口縁部1/6~底部			13-4	R-13
2	土師器・壺	堆積土	(9.6)	(5.0)	4.1	口縁部1/4~底部	外面:口縁部ヨコナデ・体部・底部手持ちヘラケズリ→ヘラミガキ・黒色処理 内面:ヘラミガキ・黒色処理		13-1	R-12
3	土師器・壺	堆積土	(14.8)			口縁部1/6~体下部	外面:口縁部ヨコナデ→体部手持ちヘラケズリ 内面:ヨコナデ 開東系土師器		13-5	R-11
4	須恵器・壺	床面	13.8	8.5	3.7	口縁部1/4~底部1/2	外面:ヨクロナデ→体部下端回転ヘラケズリ 内面:ヨクロナデ 底部:回転糸切り→回転ヘラケズリ 墨書「木」		13-2	R-6
5	須恵器・壺	堆積土	(15.0)			口縁部~体下部	外面:ヨクロナデ→体下部手持ちヘラケズリ 内面:ヨクロナデ		13-6	R-20
6	土師器・壺	床面				口縁部~体下部	外面:口縁部ヨコナデ・体部手持ちヘラケズリ→ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ・黒色処理 海綿骨針含む		13-7	R-19
7	土師器・鉢	掘方埋土				口縁部~体上部	外面:口縁部ヨコナデ→体部手持ちヘラケズリ 内面:ヨコナデ・口縁部・体部ヘラミガキ		13-8	R-22
8	土師器・鉢	カマド(新)	(6.4)			体下部~底部	外面:体部・底部手持ちヘラケズリ→ヘラミガキ 内面:ヘラナデ 内外面被熱により剥離		13-3	R-5
9	土師器・甕	煙出P(旧)	(18.8)	12.4	(20.5)	口縁部2/5~底部	外面:口縁部ヨコナデ→体部手持ちヘラケズリ・ナデツケ 被熱痕・煤付着 内面:体部ヘラナデ→口縁部ヨコナデ Po.3		13-9	R-1
10	土師器・甕	煙出P(旧)	(24.4)			口縁部1/4~体上部	外面:口縁部ヨコナデ・体部手持ちヘラケズリ 被熱痕・煤付着 内面:体部ヘラナデ→口縁部ヨコナデ Po.4		14-2	R-2
11	土師器・甕	カマド(新)	21.5			口縁部完形~体下部	外面:口縁部ヨコナデ・頭部沈線・体部手持ちヘラケズリ 被熱痕・煤付着 内面:体部ヘラナデ→口縁部ヨコナデ Po.1		13-10	R-7

第8図 SI6竪穴住居跡出土土器



第9図 SI6竪穴住居跡出土土器・石製品

地山粒を含む黒褐色シルトである。

掘方は、住居中央部から壁際に向かってドーナツ状に深く掘り込まれており、確認面からの深さは、0.36～0.46mである。掘方埋土は、地山ブロック、黒褐色土を含むにぶい黄褐色粘土質シルトである。

住居内堆積土は、4層に分かれ、1層は灰白色火山灰ブロックを多量に含む黑色シルト、2～4層は地山小ブロック、地山粒、木炭粒を含む黒褐色粘土質シルトが自然堆積している。

遺物は、掘方埋土から非ロクロ調整の土師器鉢（第8図7）、甕体部片が出土している。このうち鉢は、外面調整が、口縁部ヨコナデ後体部手持ちヘラケズリ、内面調整が、口縁部ヨコナデ後体部ヘラミガキされている。

床面からは、非ロクロ調整の土師器塊（第8図6）、甕体部片、須恵器塊（第8図4）が出土している。このうち土師器塊は、外面調整が、口縁部ヨコナデ、体部手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ、内面調整が、ヘラミガキ後黒色処理されている。須恵器塊の底部は、回転糸切りによる切り離し後底部周縁から体部下端にかけて回転ヘラケズリされている。

旧カマド煙出しピット堆積土からは、非ロクロ調整の土師器長胴甕（第8図9・10）が出土している。外面調整は、口縁部ヨコナデ後体部手持ちヘラケズリ、体部下端ナデツケ、内面調整は、体部ヘラナデ後口縁部ヨコナデされている。

新カマド側壁からは、非ロクロ調整の土師器鉢（第8図8）、長胴甕（第8図11、第9図1）が出

土している。このうち土師器鉢は、外面調整が、手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ、内面調整が、ヘラナデ、土師器甕は、外面調整が、口縁部ヨコナデ後体部手持ちヘラケズリで、(11)には頸部に1条の沈線が巡る。内面調整は、体部ヘラナデ後口縁部ヨコナデである。なお、土師器甕は、カマド構築土に伴って出土していることから、本来は新カマドに備え付けられていたものと考えられる。また、鉢は、内外面の被熱痕が著しく、支脚として使われていたものとみられる。

床面直上からは、非クロ調整の土師器壺(第8図1)、壺口縁部片、鉢口縁部～体部片、甕(第9図2)が出土している。このうち土師器壺は、平底気味の丸底で、外面調整は、口縁部ヨコナデ後体部・底部手持ちヘラケズリ、内面調整は、ヘラミガキ後黒色処理されている。

住居内堆積土からは、非クロ調整の土師器壺(第8図2)、関東系土師器壺(第8図3)、非クロ調整の土師器甕口縁部～体部片、底部片、須恵器壺(第8図5)、甕(第9図3)が出土している。このうち土師器壺は、平底で内外面ヘラミガキ後黒色処理されている。関東系土師器壺は、外面調整が、口縁部ヨコナデ後体部手持ちヘラケズリ、内面調整が、ヨコナデである。須恵器壺は、内外面クロナデされ体下部外面に手持ちヘラケズリが施されている。この他に、確認面から細粒砂岩製の砥石(第9図4)が出土している。

#### 【SI 7竪穴住居跡】(第4・5・10・11図 図版7・8・14)

C区北東側に位置する。地山面で検出した。SD10・SD11溝跡と重複し、これらより古い。倒木痕により北辺西側と東辺南側、床面の一部に攪乱が及んでいる。

平面規模は、東西が北辺4.70m、南辺4.70m、南北が東辺4.50m、西辺4.30mで、平面形は、方形である。壁は、残りの最も良い西壁で床面から0.15m残存している。東壁と西壁では直立し、北壁と南壁ではやや外側に開いて立ち上がる。方向は、西辺でみると北で西に約12°偏している。

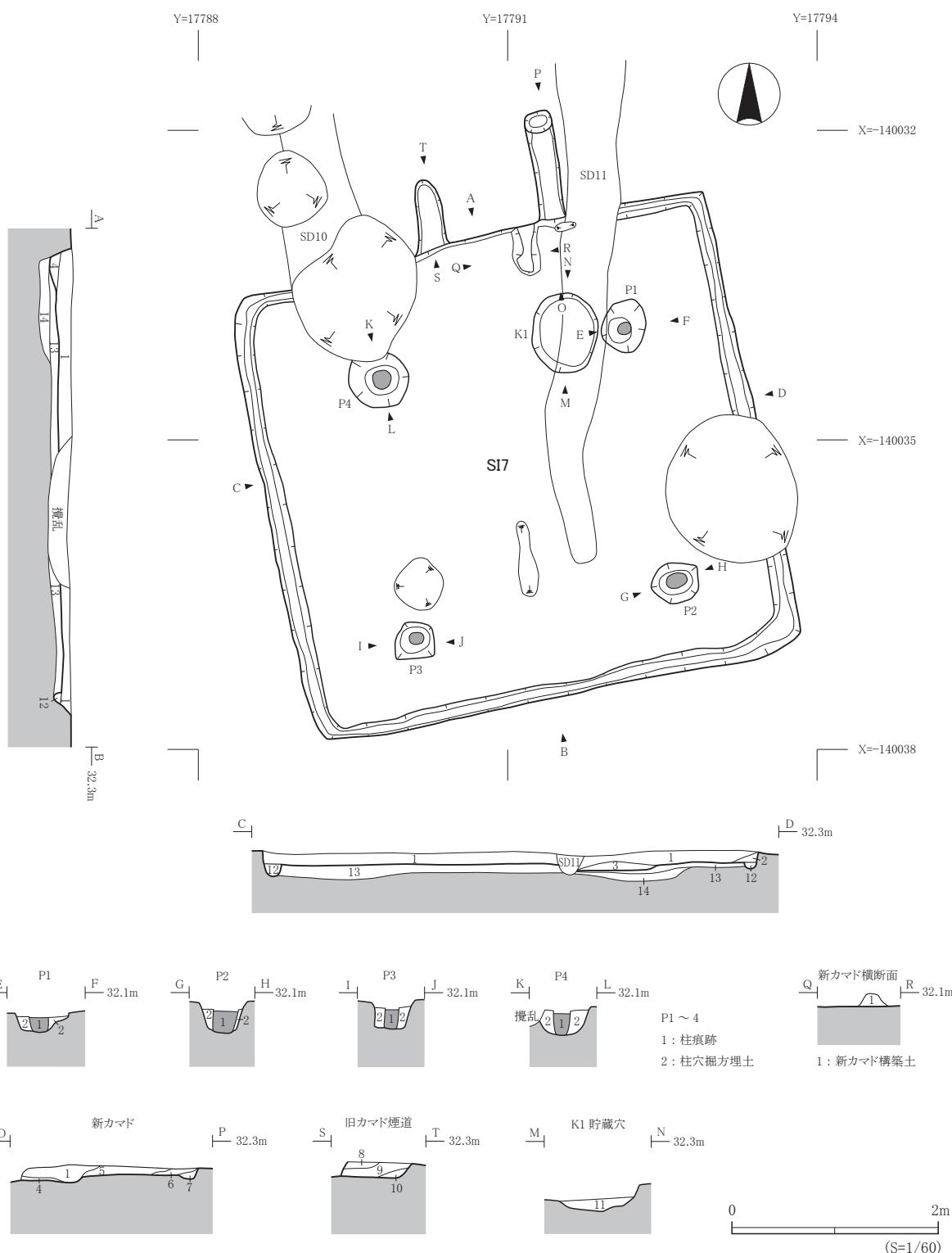
床面は、攪乱の影響でやや凹凸がみられるが、本来は平坦であったものとみられ、掘方埋土上面を床としている。

主柱穴は、住居平面形対角線上に4個が確認されている(P1～P4)。平面形は、一辺0.30～0.50mの方形、不整方形で、深さは、0.18～0.30mである。柱痕跡は、直径0.12～0.22mの円形、楕円形で、柱間寸法は、P1-P2間が2.50m、P2-P3間が2.60m、P3-P4間が2.50m、P4-P1間が2.40mである。柱穴の掘方埋土は、地山ブロックを含む灰黄褐色粘土質シルト、柱痕跡の堆積土は、地山粒を含む暗褐色砂質シルトである。

カマドは、新旧2時期に分けられ、北壁中央部やや西寄りの旧カマドからこれに接するように北壁中央部東寄りの新カマドに造り替えられている。

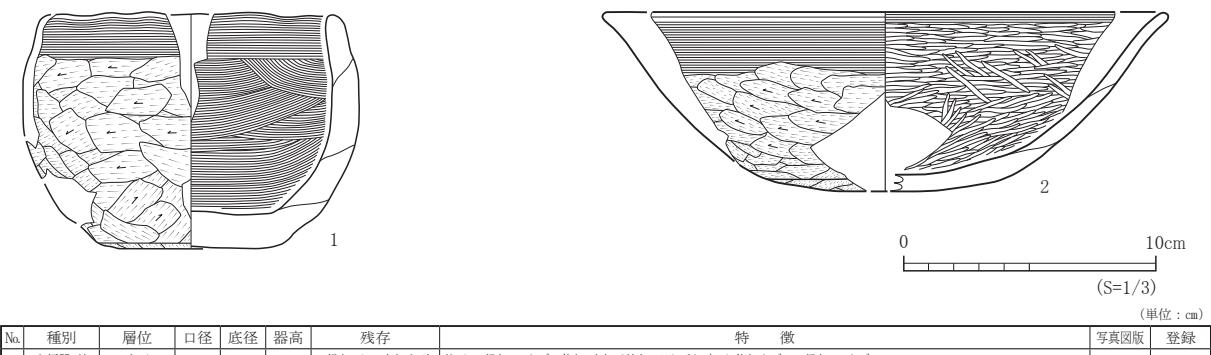
旧カマドは、煙道のみ残存している。煙道は、住居北壁より0.65m北側に延びている。煙道底面は、平坦である。堆積土は、地山粒、炭化物を含む黒褐色シルト、明黄褐色シルト、褐色粘土質シルトが自然堆積している。

新カマドは、カマドの左側壁、煙道、煙出しピットが残存している。燃焼部は、残存幅0.20m、奥行き0.45mである。カマド本体は、床面上に白色粘土を積み上げて構築している。左側壁は、長さ0.50m、幅0.28m、高さ0.17m残存している。燃焼部内の堆積土は、地山ブロック、炭化物を含むにぶい黄褐色粘土質シルトである。



層	土色	土性	混入物など	備考	層	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山粒を含む。	自然堆積	8	黒褐色(10YR2/2)	シルト	炭化物を含む。	
2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山粒を多量に含む。	壁崩落土	9	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	炭化物・地山粒を含む。	自然堆積
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む。		10	極暗褐色(7.5YR2/3)	粘土質シルト	地山粒を多量に含む。	
4	にじみ黄褐色(10YR5/4)	粘土質シルト	地山ブロック・炭化物を含む。		11	明黄褐色(10YR7/6)	シルト	地山ブロックを多量に含む。	人為堆積
5	灰黄褐色(10YR5/2)	粘土質シルト	地山ブロックを含む。		12	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山粒を含む。	周溝理土
6	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒を含む。		13	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	地山ブロックを多量に含む。	
7	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	炭化物を含む。		14	明黄褐色(10YR6/6)	粘土	黒色土を含む。	掘方埋土

第10図 SI7竪穴住居跡平面図・断面図



第11図 SI7堅穴住居跡出土土器

煙道は、カマド奥壁より 1.05m 北側に延び、その先端に煙出しピットが掘り込まれている。煙道底面は、平坦である。煙出しピットは、径 0.25m の円形を呈し、深さは、0.10m である。煙道と煙出しピットには、地山ブロック、地山粒、炭化物を含む灰黄褐色粘土質シルト・シルト、黒褐色シルトが自然堆積している。

貯蔵穴は、旧カマドに伴うものが P1 北東主柱穴の西側に接して検出されている。長軸 0.77m、短軸 0.62m の楕円形を呈し、深さは 0.25m である。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は、皿状である。埋土は、地山ブロックを多量に含む明黄褐色シルトである。

周溝は、北辺の新旧のカマド部分で途切れる以外は、壁際を全周している。人為的に埋め戻されていることから壁材の据方と考えられる。規模は、上幅 0.10 ~ 0.27m、下幅 0.05 ~ 0.20m、深さ 0.06 ~ 0.50m、断面形は、U字状である。埋土は、地山ブロックを含む灰黄褐色シルトである。

掘方は、壁際に沿って向かって深く掘り込まれており、確認面からの深さは、0.19 ~ 0.34m である。掘方埋土は、地山ブロック、黒色土を含む黒褐色粘土質シルト、明黄褐色粘土である。

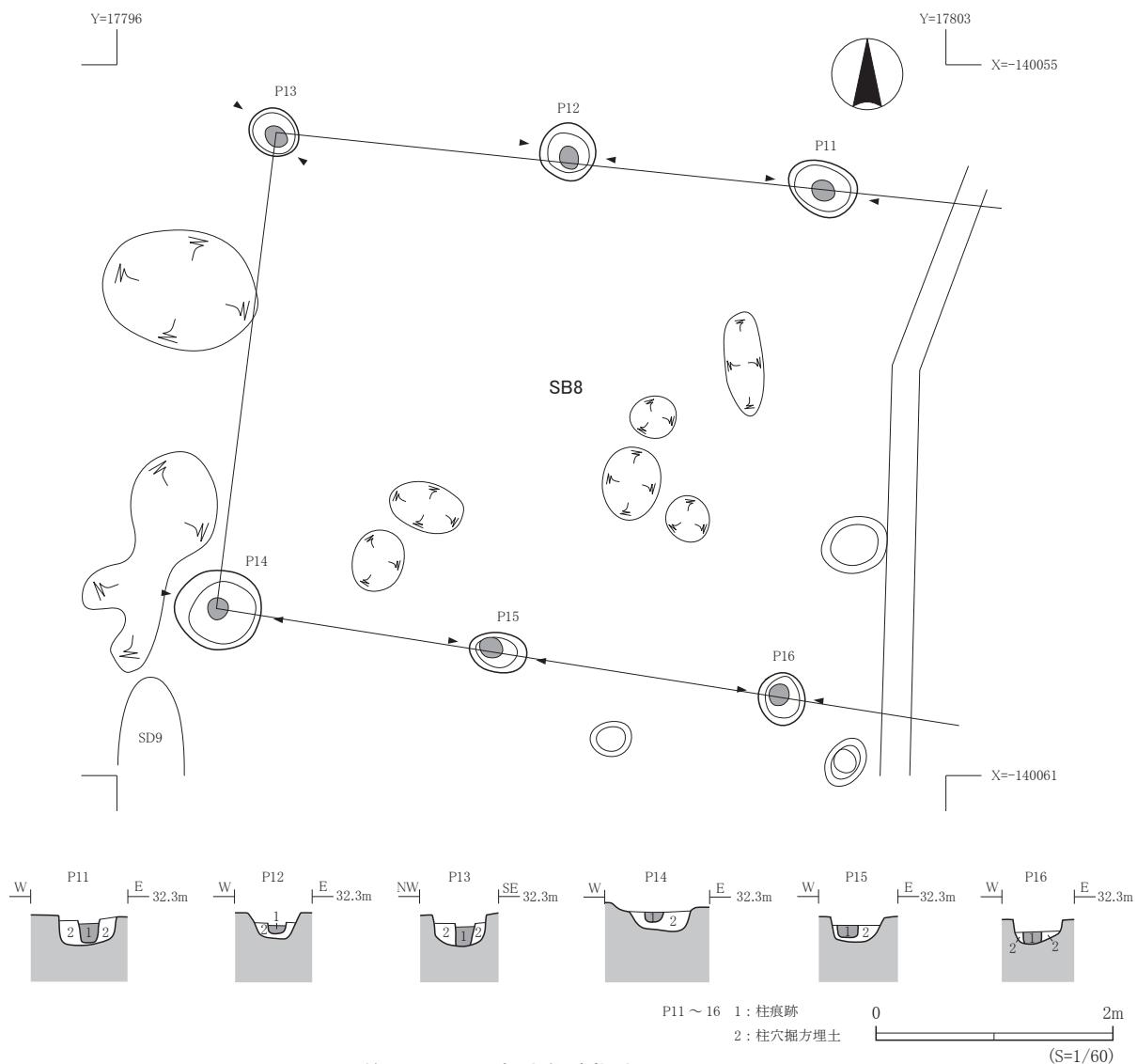
住居内堆積土は、4 層に分かれ、1 層が地山粒を含む黒褐色シルト、2 層が地山粒を多量に含む灰黄褐色シルト、3 層が地山ブロックを含む黒褐色シルト、4 層が地山ブロック、炭化物を含むにぶい黄褐色粘土質シルトで、いずれも自然堆積している。

遺物は、掘方埋土から非ロクロ調整の土師器甕口縁部片、頸部片、体部片が出土している。外面調整は、口縁部ヨコナデ後体部手持ちヘラケズリ、内面調整は、体部ヘラナデ後口縁部ヨコナデされている。

P3 南西主柱穴掘方埋土からは、非ロクロ調整の土師器甕体部片が出土している。

床面からは、非ロクロ調整の土師器鉢（第11図1・2）が出土している。このうち鉢（1）は、外面調整が、口縁部ヨコナデ後体部・底部手持ちヘラケズリ、内面調整が、体部ナデの後口縁部ヨコナデされている。鉢（2）は、平底気味の丸底である。外面調整は、口縁部ヨコナデ後体部・底部手持ちヘラケズリ、内面調整は、口縁部ヨコナデ後体部ヘラミガキされている。

住居内堆積土からは、非ロクロ調整の土師器甕口縁部片、体部片が出土しているが、小片のため図示できなかった。



第12図 SB8掘立柱建物跡平面図・断面図

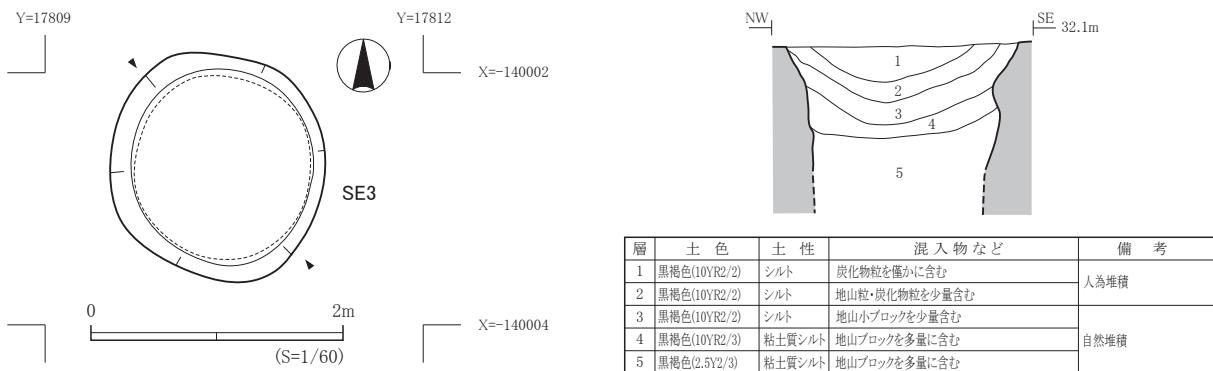
## 2. 掘立柱建物跡

【SB8 掘立柱建物跡】(第4・5・12図 図版9)

C区中央部東側の調査区壁際に位置する桁行2間以上、梁行1間の東西棟建物跡である。平成21年度調査のB区で、SB8掘立柱建物跡に伴う柱穴が検出されていないことから、桁行は2間から4間に収まるものとみられる。柱穴は、地山面で6ヶ所検出し、すべての柱穴で柱痕跡を確認している。他の遺構との重複関係はない。

平面規模は、桁行が北側柱列で総長4.65m以上、柱間寸法が西より2.46m、2.19m、南側柱列で総長4.87m以上、柱間寸法が西より、2.40m、2.47m、梁行が東妻もしくは東側柱列で4.28m、西妻で4.02mである。方向は、西妻でみると北で東に約8°偏する。柱穴は、長軸0.45～0.70m、短軸0.35～0.60mの橢円形、隅丸長方形で、深さは、0.19～0.27mである。埋土は、地山ブロックを含む黒褐色、灰黄褐色粘土質シルトである。柱痕跡は、径0.16～0.18mの円形で、堆積土は、黒褐色粘土質シルト・シルト、灰黄褐色粘土質シルトである。

遺物は出土していない。



第13図 SE3井戸跡平面図・断面図

### 3. 井戸跡

#### 【SE3 井戸跡】(第4・13図 図版10)

A区の中央部、3トレンチ北半部に位置する。地山面で検出した。他の遺構との重複関係はない。素掘りの井戸跡である。湧水とそれによる壁面の崩落が激しいため、底面までの掘り下げはできなかつた。平面形は、径1.70m～1.90mの円形で、深さは、1.30m以上である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、上半部から緩やかに外傾する。堆積土は、5層に分かれれる。1・2層は地山粒、炭化物粒を含む黒褐色シルトで、人為的埋土である。3～5層は地山ブロックを含む黒褐色シルト・粘土質シルトで自然堆積している。

遺物は出土していない。

### 4. 土坑

#### 【SK4 土坑】(第4・14図 図版10)

A区の中央部、4トレンチ北西寄りに位置する。地山面で検出した。他の遺構との重複関係はない。平面形は、長軸1.50m、短軸1.10mの楕円形で、深さは、0.30mである。壁は、緩やかに立ち上がり、断面形は、やや不整な皿状である。堆積土は、地山小ブロックを少量含む黒褐色粘土質シルトの1層で、人為的埋土である。

遺物は出土していない。

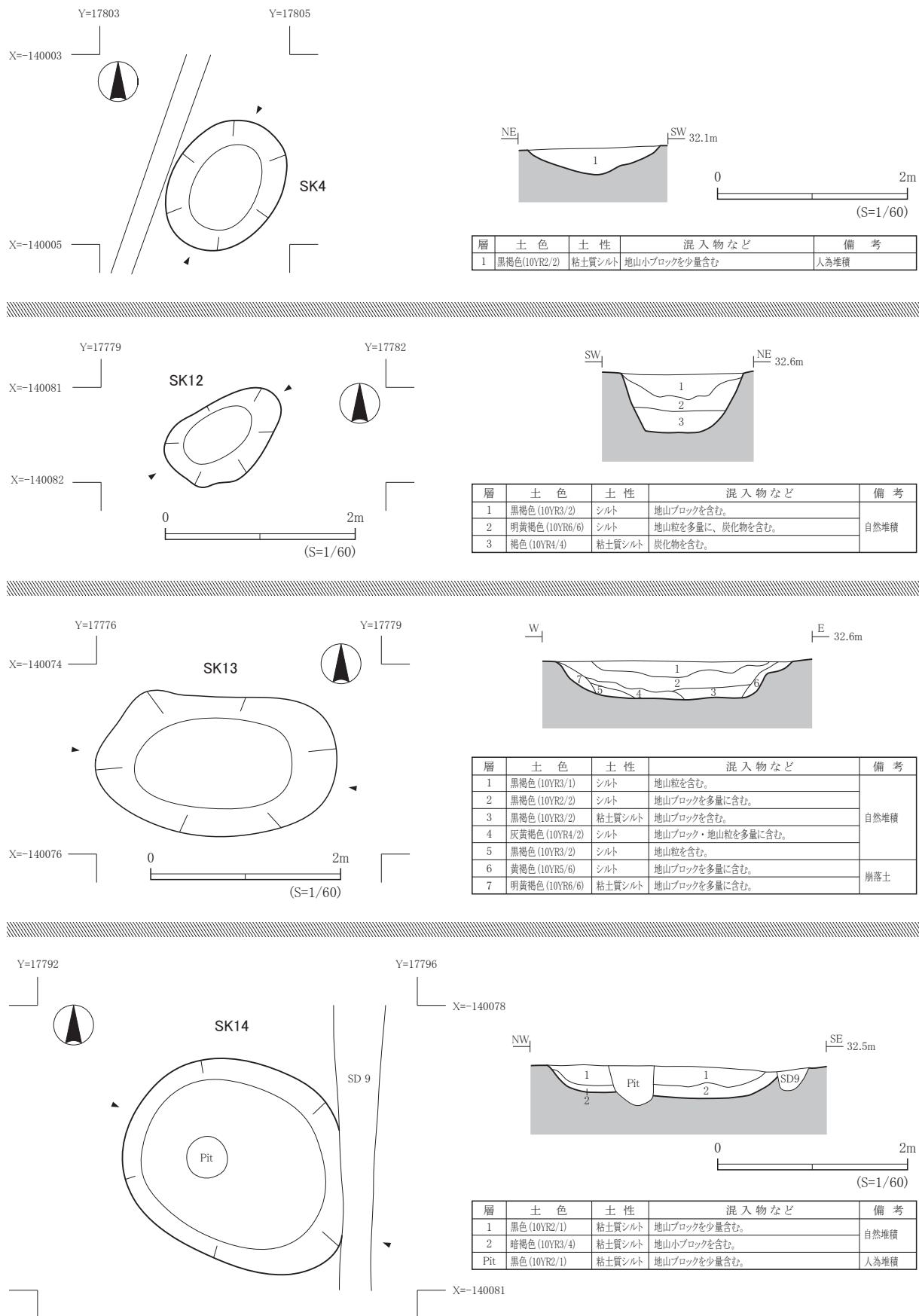
#### 【SK12 土坑】(第5・14図 図版10)

C区の南端部に位置する。地山面で検出した。他の遺構との重複関係はない。平面形は、長軸1.40m、短軸0.80mの不整楕円形で、深さは、0.62mである。壁は、急に立ち上がり、断面形は、逆台形状である。堆積土は、3層に分かれ、1層が地山ブロックを含む黒褐色シルト、2層が地山粒、炭化物を含む明黄褐色シルト、3層が炭化物を含む褐色粘土質シルトで、いずれも自然堆積している。

遺物は出土していない。

#### 【SK13 土坑】(第5・14図 図版11)

C区の南半部に位置する。地山面で検出した。他の遺構との重複関係はない。平面形は、長軸2.50m、短軸1.50mの隅丸方形で、深さは、0.40mである。壁は、緩やかに立ち上がり、断面形は、皿状である。堆積土は、7層に分かれ、1・2・5層が地山ブロック、地山粒を含む黒褐色



第14図 SK4・12・13・14土坑平面図・断面図

シルト、3層が地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルト、4層が地山ブロック・地山粒を多量に含む灰黄褐色シルト、6層が黄褐色シルト、7層が明黄褐色粘土質シルトで、いずれも自然堆積している。遺物は出土していない。

#### 【SK14 土坑】（第5・14図 図版11）

C区の南東部コーナーに位置する。地山面で検出した。SD9溝跡、P41と重複し、これらより古い。平面形は、長軸2.60m、短軸2.00mの楕円形で、深さは、0.33mである。壁は、緩やかに立ち上がり、断面形は、皿状である。堆積土は、2層に分かれ、1層が地山ブロックを少量含む黒色シルト、2層が地山小ブロックを含む暗褐色粘土質シルトで、いずれも自然堆積している。

遺物は出土していない。

#### 【SK15 土坑】（第4・5・15・16図 図版11・14）

C区の北半部に位置する。地山面で検出した。SK16土坑と重複し、これより新しい。東辺の一部が攪乱により壊されている。

平面形は、長軸3.90m、短軸3.70mの隅丸方形で、深さは、0.45mである。壁は、急に立ち上がり、断面形は、逆台形状である。堆積土は、3層に分かれ、1層が地山ブロックを含む黒色シルトの自然堆積層、2a層、2b層が地山小ブロック、地山ブロックを含むにぶい黄褐色粘土質シルトで、人為的埋土である。なお、埋戻し土である2a層上面は起伏が激しく、床面を形成するものではないこと、2a層上面や底面において、柱穴、周溝などの施設がみられないことから、竪穴遺構と捉えることはできなかった。また、後述するSK16土坑とほぼ同一箇所で重複しており、SK16土坑を埋め戻した後に掘り込まれていることから、本遺構については、SK16土坑の掘り直しの可能性がある。

遺物は、1層から非クロ調整の土師器坏（第16図1・2）、鉢体部片、甕口縁部片、体部片が出土している。このうち土師器坏（1）は、有段丸底で、外面調整は、口縁部ヨコナデ後体部・底部手持ちヘラケズリ、内面調整は、ヘラミガキ後黒色処理されている。土師器坏（2）は、関東系土師器で、外面調整は、口縁部ヨコナデ後体部手持ちヘラケズリ、内面調整は、ヨコナデである。

#### 【SK16 土坑】（第4・5・15図 図版11）

C区の北半部に位置する。地山面で検出した。SK15土坑と重複し、これより古い。北東コーナー部分を攪乱により壊されているほか、南側の大部分はSK15土坑との重複により失われている。

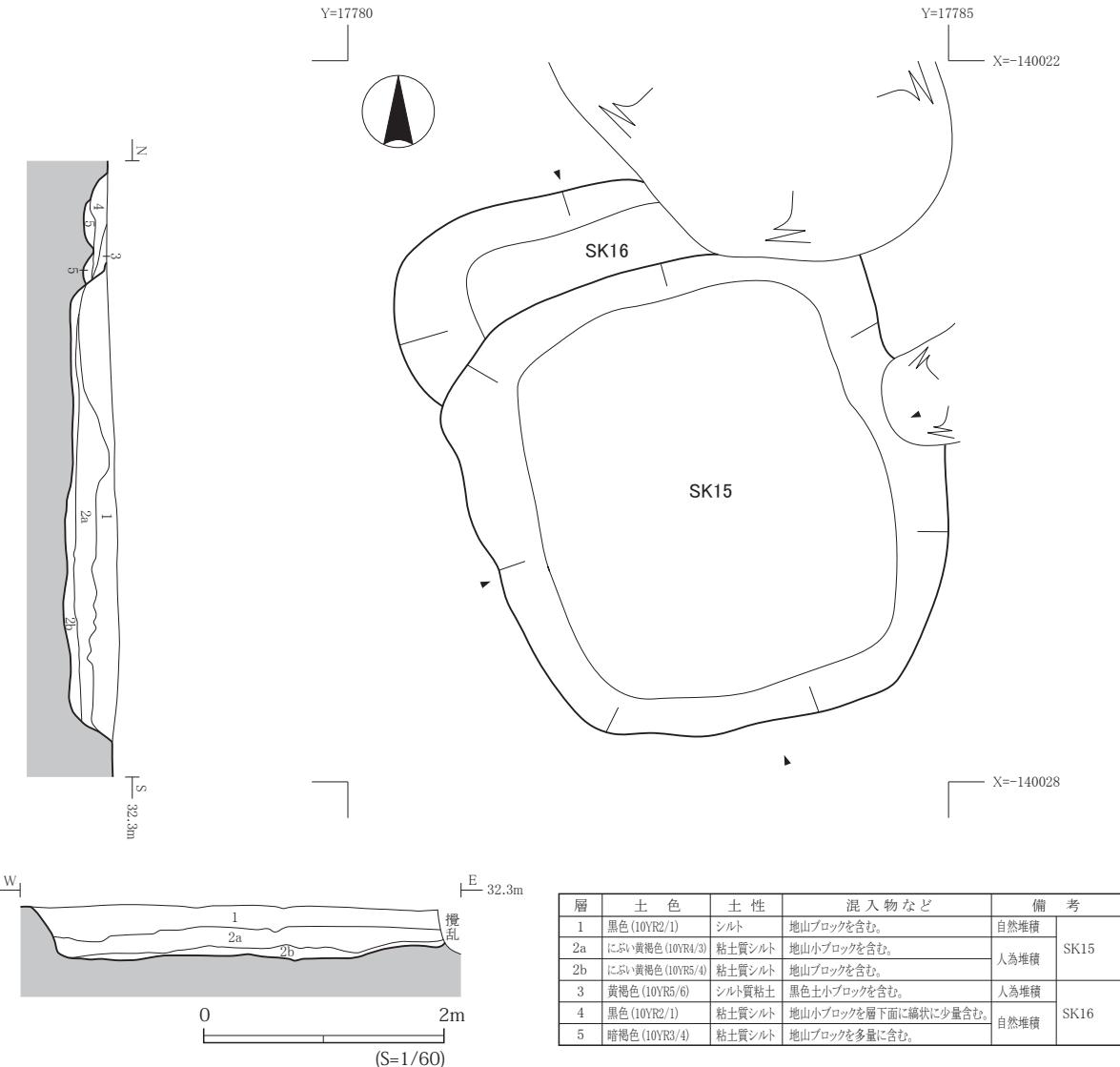
規模は、残存長が東西2.60m、南北1.00m、深さは、0.20mで、平面形は、隅丸方形を呈するものとみられる。壁は、緩やかに立ち上がり、断面形は、皿状である。堆積土は、3層に分かれ、1層が黒色土小ブロックを含む黄褐色シルト質粘土で人為的埋土、2層が地山小ブロックを少量含む黒色粘土質シルト、3層が地山小ブロックを含む暗褐色粘土質シルトで、2・3層は自然堆積層である。

遺物は出土していない。

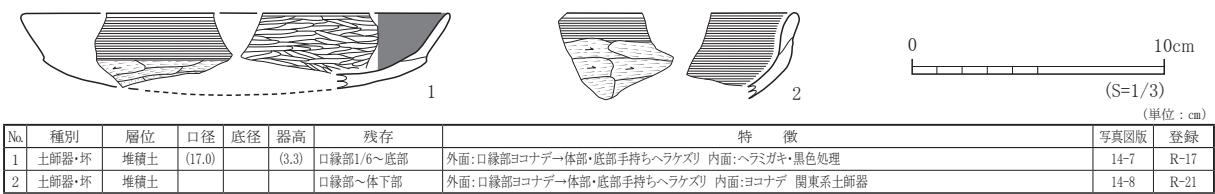
## 5. 溝跡

#### 【SD1 溝跡】（第4・17図 図版12）

A区の中央部、1トレンチから2トレンチの北半部に位置する北東から南西方向に延びる溝跡である。地山面で検出した。南西側は途中で途切れ、北東側は調査区外に延びている。



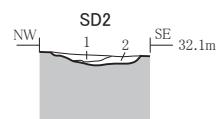
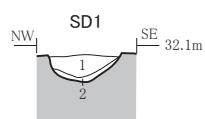
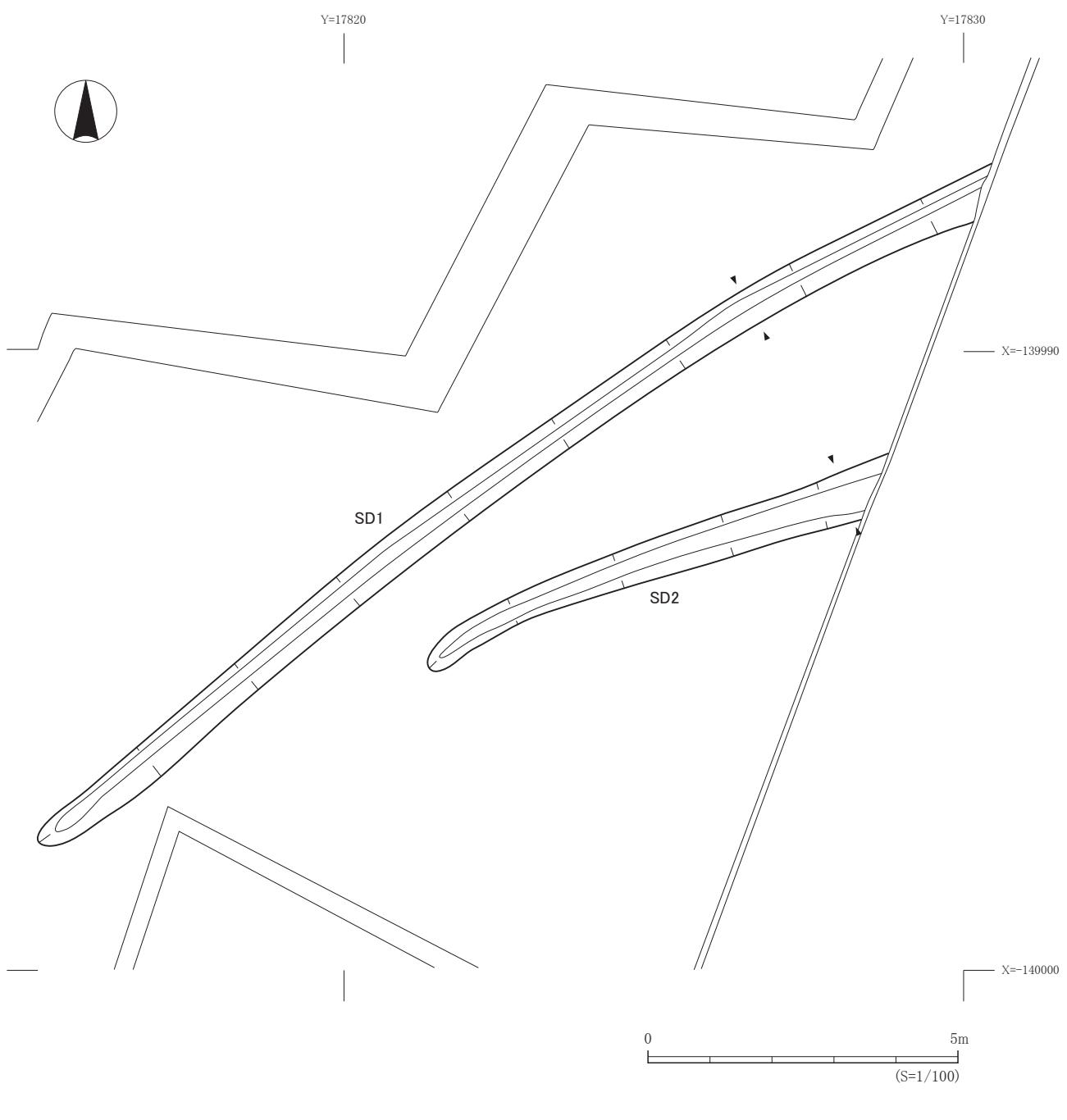
第15図 SK15・16土坑平面図・断面図



第16図 SK15土坑出土土器

検出長は、18.80mで、上幅0.60～0.70m、下幅0.10～0.20m、深さは、0.22mである。壁は、北西側では急に、南東側では緩やかに立ち上がり、断面形は、上が開いたU字状である。方向は、心心でみると北で東に約54° 傾している。堆積土は、2層に分かれ、1層が地山ブロックを少量含む黒色粘土質シルト、2層が地山ブロックを僅かに含む黒褐色粘土質シルトで、いずれも自然堆積している。

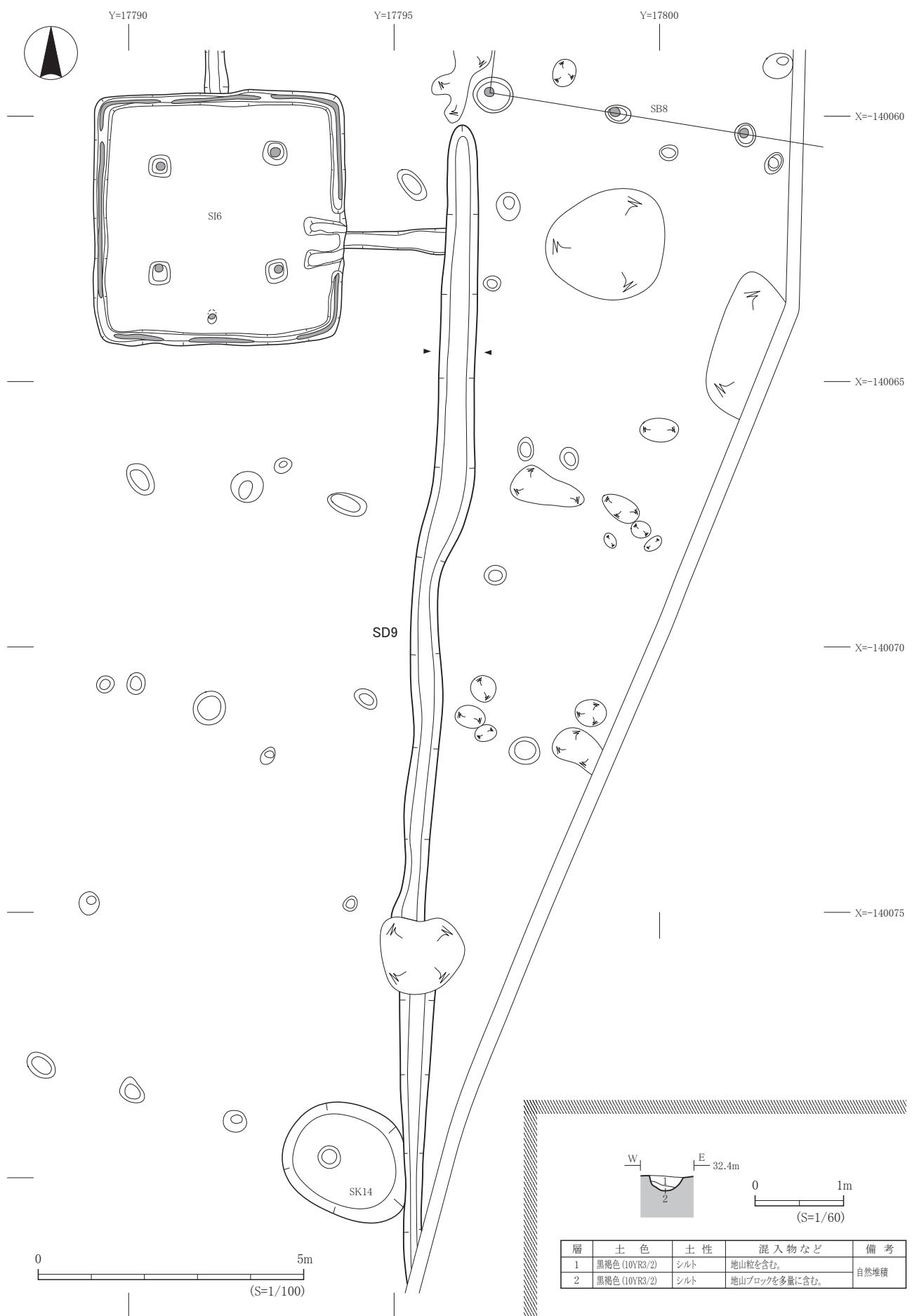
遺物は、1層から非ロクロ調整の土師器坏体部片が出土している。外面調整は、手持ちヘラケズリ、内面調整は、ヘラミガキ後黒色処理されている。



層	土色	土性	混入物など	備考
1	黒色(10YR2/1)	粘土質シルト	地山ブロックを少量含む	自然堆積
2	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	地山ブロックを僅かに含む	

層	土色	土性	混入物など	備考
1	黒色(10YR2/1)	粘土質シルト	地山粒を少量含む	
2	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	地山小ブロックを含む	自然堆積

第17図 SD1・2溝跡平面図・断面図



第18図 SD9溝跡平面図・断面図

#### 【SD2 溝跡】（第4・17図 図版12）

A区の中央部、1トレンチから2トレンチの北半部に位置する東西方向に延びる溝跡である。地山面で検出した。西側は途中で途切れ、東側は調査区外に延びている。

検出長は、8.10mで、上幅0.45～0.80m、下幅0.15～0.50m、深さは、0.12mである。壁は、両側とも緩やかに立ち上がり断面形は、皿状である。方向は、心心でみると東で北に約14°偏している。堆積土は、2層に分かれ、1層が地山粒を少量含む黒色粘土質シルト、2層が地山小ブロックを含む黒褐色粘土質シルトで、いずれも自然堆積している。

遺物は出土していない。

#### 【SD9 溝跡】（第4・5・18図 図版12）

C区の南東部に位置する南北方向に延びる溝跡である。地山面で検出した。S I 6堅穴住居跡、S K 1 4土坑と重複し、これらより新しい。北側は途中で途切れ、南側は調査区外に延びている。南側の一部は、攪乱により壊されている。

検出長は、22.30mで、上幅0.40～0.70m、下幅0.15～0.30m、深さは、0.20mである。壁は、直立気味に立ち上がり、断面形は、U字状である。方向は、心心でみると北で東に約2°偏している。堆積土は、2層に分かれ、1層が地山粒を含む黒褐色シルト、2層が地山ブロックを多量に含む黒褐色シルトで、いずれも自然堆積している。

遺物は、1層から非クロ調整の土師器甕体部破片が出土している。外面調整は、手持ちヘラケズリ、内面調整は、ヘラナデである。

#### 【SD10 溝跡】（第4・5・19図 図版12）

C区の北東部に位置する南北方向に延びる溝跡である。地山面で検出した。S I 7堅穴住居跡と重複し、これより新しい。北側、南側ともに途中で途切れ、南側は大半が攪乱により壊されている。

検出長は、11.40mで、上幅0.40～0.80m、下幅0.15～0.60m、深さは、0.15mである。壁は、緩やかに立ち上がり、断面形は、上が開いたU字状である。方向は、心心でみると北で西に約11°偏している。堆積土は、1層で小礫、地山ブロックを含む黒色粘土質シルトが自然堆積している。

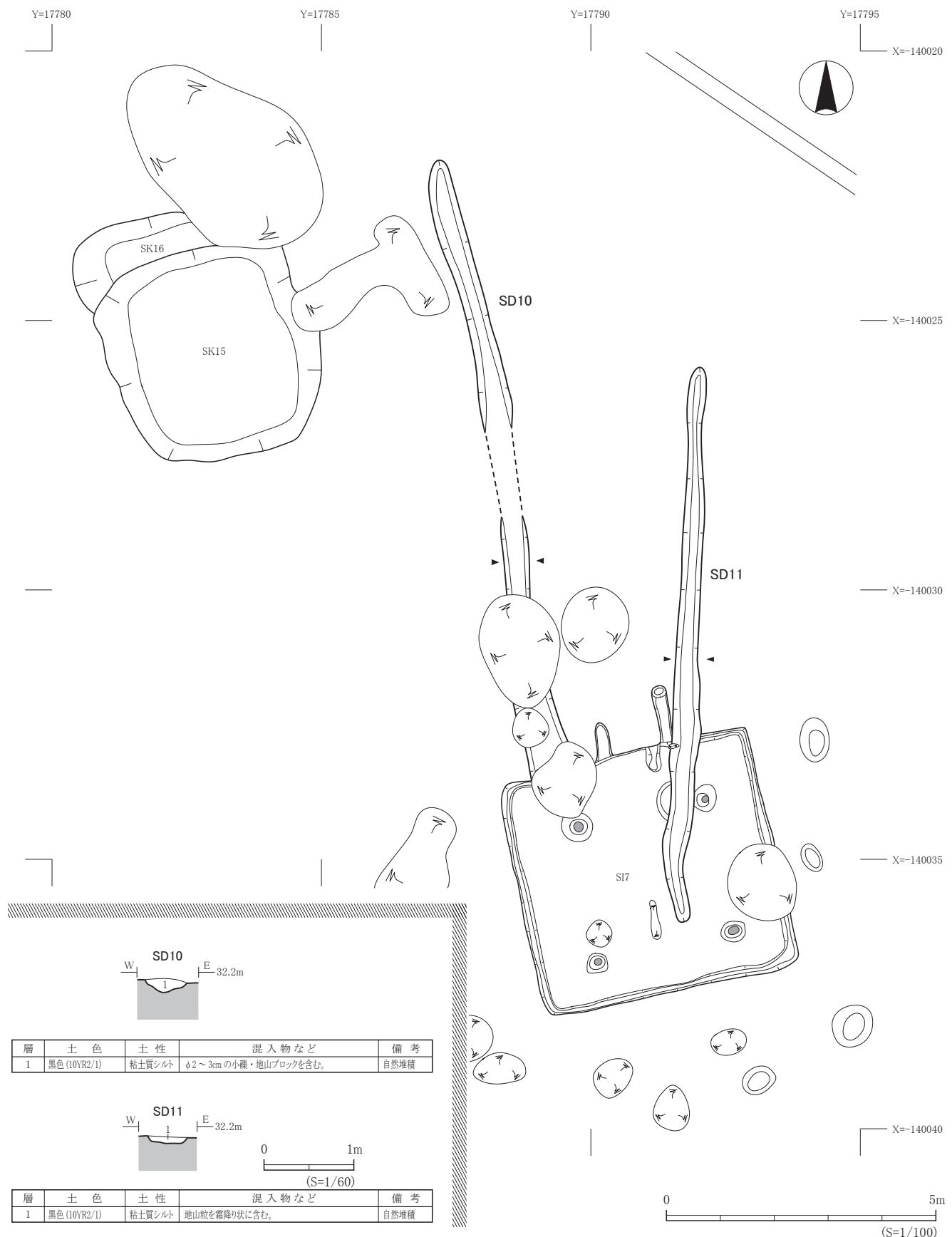
遺物は出土していない。

#### 【SD11 溝跡】（第4・5・19図 図版12）

C区の北東部に位置する南北方向に延びる溝跡である。地山面で検出した。S I 7堅穴住居跡と重複しこれより新しい。北側、南側ともに途中で途切れている。

検出長は、10.30mで、上幅0.30～0.50m、下幅0.20～0.35m、深さは、0.25mである。壁は、緩やかに立ち上がり、断面形は、逆台形状である。方向は、心心でみると北で東に約2°偏している。堆積土は、1層で地山粒を含む黒色粘土質シルトが自然堆積している。

遺物は出土していない。



第19図 SD10・11溝跡平面図・断面図

## V 総括

今回の調査で出土した遺物は、非ロクロ調整の土師器壺・塊・鉢・甕、須恵器壺・甕、近世陶器、砥石、銭貨などで、出土総数は、整理用テンバコ3箱分である。この中で図示したものは、S I 6 壁穴住居跡出土土師器11点、須恵器3点、砥石1点、S I 7 壁穴住居跡出土土師器2点、S K 1 5 土坑出土土師器2点である。ただし、土器の中で全体の器形が捉えられるものは限られており、資料数も少ない。したがって、器種毎の分類は行わず、遺構毎にその特徴を記述し、年代的な位置付けを行っていくこととする。

遺構については、対象を壁穴住居跡に絞り、当該期における周辺遺跡の状況と対比させながら検討していくこととする。

### 1. 遺物について

#### (1) S I 6 壁穴住居跡出土土器

非ロクロ調整の土師器、須恵器が、床面、床面直上、新カマド側壁、古カマド煙出しピット堆積土、掘方埋土、住居内堆積土から出土している。このうち住居の機能時もしくは廃絶時に伴うと考えられるのは、床面出土の土師器塊1点、須恵器壺1点、新カマドの側壁出土土師器鉢1点、甕2点である。また、掘方埋土の土師器鉢1点、古カマド煙出しピット堆積土の土師器甕2点、床面直上の土師器壺1点、甕1点については、それぞれ、住居の構築段階、機能段階、廃絶直後のものとみられるが、土器の様相の上で全体的に大きな違いはみられない。このため、これらの土器についても、住居に伴うものとして個々に検討を加えることとする。

#### 土師器

壺(8-1)は、平底気味の丸底で、底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、器高はやや浅い。外面に段・稜・沈線を持たない。法量は、口径15.0cm、底径9.8cm、器高4.8cmである。調整は、外面が口縁部ヨコナデ後体部・底部手持ちヘラケズリ、内面がヘラミガキ後黒色処理されている。

塊(8-6)は、口縁部から体上部の破片である。体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部で直立する。調整は、外面が口縁部ヨコナデ、体部手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ、内面がヘラミガキ後黒色処理されている。胎土は緻密で、海綿骨針が含まれる。

鉢(8-8)は、平底で、底部から体上部にかけて残る。底部から体部にかけて外傾しながら立ち上がり、体上部で直立する。調整は、外面が体部・底部手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ、内面がヘラナデである。内外面とも被熱による赤変、器壁の剥離が著しく、新カマド内で支脚として使用されていたものとみられる。

鉢(8-7)は、口縁部から体上部の破片で、直立気味に外傾しながら立ち上がり、外面には段・稜・沈線を持たない。調整は、外面が口縁部ヨコナデ後体部手持ちヘラケズリ、内面が口縁部ヨコナデ後ヘラミガキである。

甕(8-10、8-11、9-1)は、口縁部に最大径を持ち頸部が屈曲する大型の長胴甕である。

甕(8-11)は、口縁部が直線的に外傾し、口唇部は角状を呈する。頸部にはヘラ先による沈線が巡り段を形成する。体部は上半部にやや張りをもった円筒形をなす。法量は、口径21.5cmである。

甕（8-10）は、口縁部から体上部の大破片である。口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がり、口唇部は丸く收まる。頸部には段を形成する。法量は、口径 24.4cm である。

甕（9-1）は、口縁部から体部の大破片である。口縁部は直線的に外反しながら立ち上がり、口唇部は丸く收まる。体上部に張りをもつ。法量は、口径 20.8cm である。調整は、いずれも外面が口縁部ヨコナデ・体部手持ちヘラケズリ、内面が体部ヘラナデ後口縁部ヨコナデである。

甕（8-9）は、中型の甕である。体部が円筒形で、頸部は屈曲し、段・沈線を持たない。法量は、口径 18.8cm、底径 12.4cm、器高 20.5cm である。調整は、外面が口縁部ヨコナデ後体部手持ちヘラケズリ、体部下端ナデツケ、内面が体部ヘラナデ後口縁部ヨコナデである。

甕（9-2）は、小型の甕である。頸部は屈曲し、ヘラ先による沈線が巡り段を形成する。口縁部は直立気味に外反しながら立ち上がる。法量は、口径 14.6cm である。調整は、外面が口縁部ヨコナデ・体部手持ちヘラケズリ、内面が体部ヘラナデ後口縁部ヨコナデである。

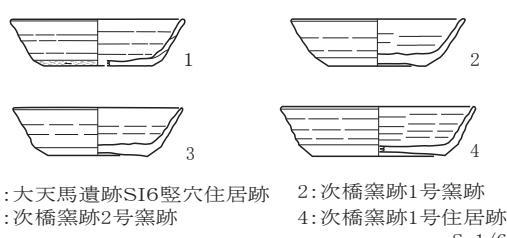
#### 須恵器

壺（8-4）は、平底で、底部から口縁部にかけて直線的に外傾しながら立ち上がり、逆台形状を呈する。底部の切り離しは、回転糸切りで、切り離し後底部周縁と体部下端に回転ヘラケズリによる再調整を施し、このため体部下端では、外面が外側に張り出すように屈曲する。底部外面には「木」の墨書が認められる。法量は、口径 13.8cm、底径 8.5cm、器高 3.7cm で、口径 / 底径比は 0.616、口径 / 器高比は 0.268 である。

S I 6 堅穴住居跡出土土器群について特徴を列挙すると、

- ① 土師器は、製作にロクロを使用せず、器種には壺・塊・鉢・甕があり、須恵器を伴う。
- ② 土師器壺は、平底気味の丸底で底径が大きく、外面には段・稜・沈線を持たない。
- ③ 土師器甕は、口径に最大径をもつ長胴甕で、頸部に段・沈線を持つものと持たないものがある。口唇部は角状か、丸みを帶びる。
- ④ 土師器甕体部の外面調整は、手持ちヘラケズリ、内面調整は、ヘラナデである。
- ⑤ 須恵器壺は、平底で底径が大きく、器形は逆台形状を呈し、底部切り離し後回転ヘラケズリ再調整が施される。

同様の特徴を持った土器群のうち、土師器の類似資料としては、栗原市糠塚遺跡第1群土器（宮城県教育委員会 1978）、同原田・下萩沢遺跡 I B 群土器（宮城県教育委員会 2009）、同経ヶ崎遺跡 S I 6 住居跡出土土器（高清水町教育委員会 2000）がある。年代は、糠塚遺跡第1群土器が、国分寺下層式期の8世紀後半、原田・下萩沢遺跡 I B 群土器が、8世紀後半、経ヶ崎遺跡 S I 6 住居跡出土土器が、8世紀後半でもやや新しい時期とされている。よって S I 6 堅穴住居跡出土土師器は、8世紀



1: 大天馬遺跡SI6堅穴住居跡  
2: 次橋窯跡1号窯跡  
3: 次橋窯跡2号窯跡  
4: 次橋窯跡1号住居跡  
S=1/6

第20図 須恵器壺の比較

後半に收まるものと捉えられる。

一方、須恵器について、S I 6 堅穴住居跡出土須恵器壺と同じく、底部切り離しが回転糸切りでその後に底部周縁と体部下端に回転ヘラケズリ再調整を施す資料としては、大崎市次橋窯跡 1 号窯跡、2 号窯跡、1 号住居跡出土土器（松山町教育

委員会 1983) が挙げられ (第 20 図)、年代は、日の出山窯跡群に後続する時期の 8 世紀第 3 四半期頃とされている。したがって、S I 6 壺穴住居跡出土須恵器坏は、8 世紀第 3 四半期頃のものと考えられ、土師器の年代観とも整合する。

なお、須恵器坏に関しては、底部から口縁部にかけて直線的に外傾し、体部下端が外に強く張るといった器形的特徴や、底部の切り離し技法とその後の再調整のあり方などの技法的特徴から、次橋窯跡製品との類似性が強く窺える。ただし、両者を比較した場合、胎土に違いがあることから (註 1)、S I 6 壺穴住居跡出土須恵器坏は、次橋窯跡の技術的系譜を受け継いだ工人によって製作され、本遺跡周辺の未発見窯からもたらされたものとみられる。

### (2) S I 7 壺穴住居跡出土土器

床面から非ロクロ調整の土師器鉢 2 点が出土している。S I 6 壺穴住居跡出土土器と比べて、器種の欠落が著しく住居廃絶時にほとんどの遺物が持ち出されたものと考えられる。

鉢 (11 - 1) は、平底で、底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁部でやや内傾する。調整は、外面が口縁部ヨコナデ後体部・底部手持ちヘラケズリ、内面が体部ナデ後口縁部ヨコナデである。法量は、口径 11.8cm、底径 5.8cm、器高 9.3cm である。他の鉢と比較した場合、法量に対して器壁が厚いことから、甕の製作途中に鉢に作りかえた可能性が考えられる。

鉢 (11 - 2) は、口縁部から底部の破片である。底部は平底気味の丸底で、全体の器形はやや扁平な半球状を呈する。須恵器鉢の模倣形態と捉えられる。底部から内湾気味に外傾しながら立ち上がり、口縁部で軽く外反する。外面に段・稜・沈線をもたない。調整は、外面が口縁部ヨコナデ後体部手持ちヘラケズリ、内面が口縁部ヨコナデ後ヘラミガキである。

これらの土器の類例として鉢 (11 - 1) には、8 世紀前葉とされる大崎市名生館官衙遺跡 S I 175 住居跡出土土器 (宮城県多賀城跡調査研究所 1983)、8 世紀前半とされる栗原市御駒堂遺跡第 2 群土器 (宮城県教育委員会 1982)、8 世紀前半とされる大崎市金鑄神遺跡 10 号住居跡出土土器 (宮城県教育委員会 1992) がある。鉢 (11 - 2) には、7 世紀後半から 8 世紀初頭とされる大和町一里塚遺跡 47 次調査住居跡・S D 33 溝跡出土土器群 (宮城県教育委員会 1999)、いずれも 8 世紀前半とされる栗原市御駒堂遺跡第 2 群土器、同佐内屋敷遺跡第 6 号住居跡出土土器 (宮城県教育委員会 1983)、大崎市八幡遺跡 1 号住居跡出土土器 (宮城県教育委員会 1991) がある。とくに鉢 (11 - 2) は、一里塚遺跡では、外面が手持ちヘラケズリ後ナデ、内面がナデという調整の違いはみられるものの、器形的特徴・法量が極めてよく近似している。ただし、S I 7 壺穴住居跡出土土器については、土師器の他の器種や須恵器といった比較資料が欠落していること、本遺跡において 7 世紀代まで確実に遡る資料が出土していないことから、一里塚遺跡出土土器群との類似性を指摘するに留め、S I 7 壺穴住居跡出土土器の年代観としては、8 世紀前半に位置付けられるものと捉えておきたい。

### (3) SK 15 土坑出土土器

堆積土から非ロクロ調整の土師器坏 (15 - 1) 1 点、関東系土師器坏 (15 - 2) 1 点が出土している。出土状況から SK 15 土坑に直接伴うものではなく、埋没時に周辺部から流入したものである。

坏 (15 - 1) は、有段丸底である。器高は浅く、体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。調整は、

外面が口縁部ヨコナデ後体部・底部手持ちヘラケズリ、内面がヘラミガキ後黒色処理されている。坏(15-2)は、底部から口縁部にかけて内湾氣味に外傾しながら立ち上がり、口縁部が外反する。調整は、外面が口縁部ヨコナデ後体部手持ちヘラケズリ、内面がヨコナデである。これらの土器のうち坏(15-1)は、8世紀前半代とされる栗原市原田・下萩沢遺跡IA群土器、同御駒堂遺跡第2群土器に、坏(15-2)は御駒堂遺跡第2群土器、8世紀前葉頃に比定される栗原市山ノ上遺跡第1住居跡出土土器（宮城県教育委員会1980e）に類例がみられる。したがって、これらの土器は、8世紀前半のものと考えられる。

## 2. 遺構について

### (1) 壇穴住居跡の年代について

検出された壇穴住居跡は3軒である。相互に重複関係はなく、切り合いから平面的な前後関係は提示できないが、前項で行った遺物の検討から、SI7壇穴住居跡は8世紀前半、SI6壇穴住居跡は床面出土の須恵器坏の年代観から8世紀第3四半期を上限とする8世紀後半とみられ、SI5壇穴住居跡についても出土遺物から、8世紀代に収まるものと捉えられた。SI6壇穴住居跡には、堆積土1層に10世紀前葉に降下したとされる灰白色火山灰ブロックが多量に含まれ、この頃までには埋没していたことが明らかである。なお、平成21年に栗原市が今回の調査区の東側隣接地で、個人住宅の宅地・畠地造成に伴って実施した確認調査では、SI6壇穴住居跡と同様に、堆積土の上層に灰白色火山灰を含む古代の壇穴住居跡が3軒(SI1～SI3)検出されている。年代は、床面出土の須恵器坏やカマド出土の非ロクロ調整の土師器球胴甕などの特徴から、いずれも8世紀代のものとみられ、これ以外の出土遺物は、近世末の陶器擂鉢のみとなっている。これらのことから、大天馬遺跡の壇穴住居跡の年代は、全て8世紀代に収まるものと考えられる。

### (2) 壇穴住居跡の構造について

大天馬遺跡でこれまでに発見された壇穴住居跡の属性についてまとめたものが第1表である。なお、SI1～3については、確認調査に留まっているため、データの一部のみを収録している。これをみると、方向は西辺を基準とした場合、南北方向より西に振れる(N-5°～12°-W)もの(SI5・7)、東に振れる(N-8°-E)もの(SI3)、ほぼ真北を基準(N-1°-E～N-2°--W)としたもの(SI1・2・6)に分かれる。SI7壇穴住居跡が8世紀前半、SI6壇穴住居跡が8世紀後半であることを勘案すると、方向が西に振れるものから真北基準のものへと変遷していった可能性が考えられる。規模は、一辺が3.5～3.9mのやや小型のもの(SI1・2)、4.3～4.7mの中型のもの(SI6・7)、5.5～5.9mのやや大型のもの(SI3・5)がある。

平面形は、比較的形の整った方形を呈するものが主体を占め、残存状況の良くないSI5壇穴住居跡では隅丸方形を呈するものとみられる。床面は、確認されているものでみると、いずれも地山土を埋め戻して床を構築している。

主柱穴は、方形を基調とし、平面形に対して対角線上に4個みられる。柱痕跡は、円形である。SI6壇穴住居跡では、南壁中央部の住居出入り口部分に梯子ピットがある。SI5壇穴住居跡では、柱の切り取りがなされており、廃絶時に柱材の転用が行われたものと考えられる。これ以外で住居に伴う柱穴は確認されておらず、外周溝や外延溝も認められない。

第1表 壇穴住居跡属性表

遺構名	年代	方向(西辺基準)	規模(m)		平面形	掘方	主柱穴	カマド位置	煙道長(m)	カマド構築材	周溝		備考
			北辺・南辺×東辺・西辺								有	無	
SI7	8世紀前半	N-12° -W	4.7・4.7×4.5・4.3	方形	有	4	北壁中央西寄り→中央東寄り	0.65・1.05	白色粘土	有	無	SI7→SD10・11	
SI6	8世紀後半	N-1° -E	4.6・4.4×4.6・4.6	方形	有	4	北壁中央→東壁中央南寄り	1.6・2.3	白色粘土	有	有	SI6→SD9	堆積土上層に灰白色火山灰を含む
SI5	8世紀	N-5° -W	2.6～2.7×2.5・5.9	隅丸方形	有	4?	北壁中央?	?	?	有	無	掘方の一部まで削平され、床面残存せず	
SI1	8世紀	N-2° -W	3.9・3.8×3.9・3.8	方形	?	?	北壁中央東寄り	0.7	?	有	?	栗原市確認調査	堆積土に灰白色火山灰含む
SI2	8世紀	N-2° -W	3.9・3.5×3.5・3.6	方形	有	?	北壁中央	1.5	?	有	?	栗原市確認調査	堆積土に灰白色火山灰含む
SI3	8世紀	N-8° -E	5.6・5.7×5.5・5.7	方形	有	?	北壁中央東寄り	2.1	白色粘土	有	?	栗原市確認調査	堆積土に灰白色火山灰含む

カマドの位置は、SI5壇穴住居跡を除いたすべての住居で北壁中央部を中心に付設されており、SI6壇穴住居跡では、北壁中央から東壁中央南寄りに、SI7壇穴住居跡では、北壁中央西寄りから中央東寄りに造り替えられている（註2）。カマド燃焼部は、住居内部にあり、住居の壁に沿うようにカマド奥壁が造られている。カマド構築材に白色粘土を使用しているものは、SI3・6・7壇穴住居跡でみられる。カマドの構築法は、SI6壇穴住居跡新カマドでみると、床面にカマド掘方を掘り込み、地山土を埋め戻してカマド底面を補強したのち、その上に土器や瓦、切石といった芯材は使わず、白色粘土を積み上げてカマド側壁部を構築している。

煙道は、いずれも住居の外側に長く延び、SI6壇穴住居跡新旧カマド、SI7壇穴住居跡新カマドでは、先端に煙出しピットが取り付く。煙道長の最短は、SI7壇穴住居跡旧カマドに伴うもので0.65m、最長は、SI6壇穴住居跡新カマドに伴うもので2.3mである。堆積土に被熱痕がみられるところから、本来は地山をトンネル状に掘り抜いて構築していたものが、廃絶後に崩落したものと考えられる。底面は、SI6壇穴住居跡では、煙出しピットに向かって低く傾斜するが、SI7壇穴住居跡では、平坦に掘り込まれている。なお、住居の廃絶時にカマド本体を故意に破却したような痕跡は認められていない。

貯蔵穴は、SI7壇穴住居跡で旧カマドに伴うものが見つかっている。

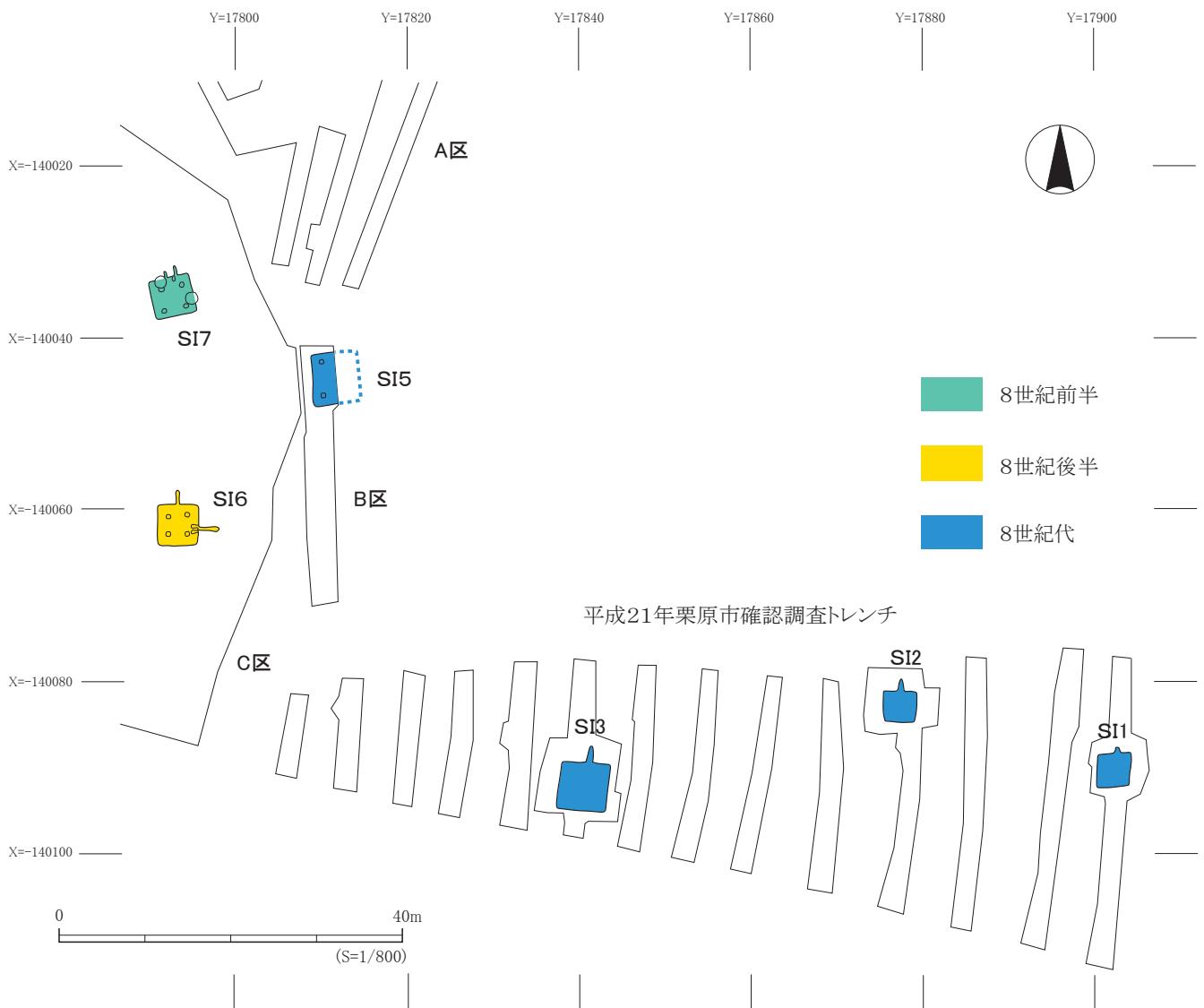
周溝は、SI2・3・5・6・7壇穴住居跡で検出されている。このうちSI6壇穴住居跡では壁材痕跡が残存している。いずれの周溝も黒色土を含む地山土で埋め戻されており、カマド下を貫通しておらず、カマド部分で途切れていることから、開渠ではなく壁材据方とみられる。

住居の構造は、カマド位置や平面形から見て取れるように、相互に斎一性が高く、SI3・5壇穴住居跡が比較的大型である他は、規模・施設・構造等において特に際立った違いはみられない（註3）。この点については、集落構造や個々の居住者の性格に規定されたものと理解し得る。

### (3) 集落の様相について

壇穴住居跡によって構成される集落は、北側と南側を沢によって画された段丘上の平坦面に占地され、8世紀を通じて展開していたものである。今回の調査では、8世紀前半と8世紀後半に時期区分が可能な壇穴住居跡が、それぞれ1軒ずつ確認された。ただし、住居跡の総数は、栗原市確認調査分を含めても6軒と分布状況は極めて閑散としたものとなっている。これらの住居跡は、相互に重複、あるいは近接することなく点在しているが、段丘平坦面がA・B区の東側に広がっていることから、集落の範囲は、さらに東側に及ぶものと考えることもできる。

カマドは、東壁に造り替えられた1箇所を除くと全て住居北壁に設置されており、集落内においてカマドの方向に対して何らかの規制が働いていた可能性が高い。出土遺物は、在地の土師器が主体であり、



第21図 竪穴住居跡の分布状況

須恵器の出土量は僅かである。遺物の中には関東系土師器壺が認められるが、遺構に直接伴うものではなく流れ込みであり、周辺から持ち込まれたものと思われる。

住居の構造としては、土師器甕や切石などの芯材・高架材を使わずに白色粘土で構築したカマドを住居内部に設置し、煙道が住居外に長く延びる在地型カマドを採用している(註4)。以上のことから、集落は、在地の住民によって構成されていたものと想定される。

住居が間隔をおいて点在していることに関しては、8世紀代の周辺の他の遺跡と比較した場合、本遺跡北東側0.7kmから南東側0.8kmの丘陵部に位置し、いずれも8世紀前葉とされている栗原市山ノ上遺跡や同木戸遺跡(宮城県教育委員会1980d)、本遺跡南側1.0kmの丘陵部に位置し、8世紀前半から8世紀後半とされている同佐内屋敷遺跡、本遺跡北東側4.2kmの段丘上に位置し、8世紀後半とされている同大門遺跡(宮城県教育委員会1980a)などでも同様の状況が明らかとなっている(註5)。ただし、山ノ上遺跡では、住居跡に関東系土師器・須恵器を多く含んでいることから、集落の構成員

は関東地方からの移民であったものとみられる。一方、本遺跡北側 0.4 ~ 1.3km の段丘上に位置する御駒堂遺跡では、7世紀末から8世紀前葉にかけて、山ノ上遺跡と同様の性格を持った集落が出現し、その後の8世紀前半には関東系土師器と関東型カマドを主体的に含む住居数23軒の大規模な集落に発展しており、関東からの移民によって成立・展開した集落と捉えられている（註6）。御駒堂遺跡の集落は、その後も8世紀後半から9世紀前半にかけて継続するが、その間の住居は6軒と住居数が極端に減少する。このような集落の様相の変化から、移民集落が、その後、分散、解体し、在地集落へと性格を転換させていった可能性が窺える。

本遺跡南側 0.5 ~ 1.4km の丘陵部に立地する原田・下萩沢遺跡では、8世紀代に竪穴住居跡と掘立柱建物跡および掘立柱塀跡や材木塀跡などの区画施設からなる集落が形成されている。特に、倉庫とみられる総柱建物跡が柱筋を揃えて建ち並んでいる状況や円面硯を含む多量な須恵器の存在、刀子・鎌・鐸・挂甲小札・鞘尻金具などの鉄製品の出土といった点から、在地の一般集落というよりも官衙に関連する集落とみることができる。

栗原郡内における本遺跡周辺の個々の集落の様相を比べると、木戸遺跡や佐内屋敷遺跡、大門遺跡などの在地の一般集落と並立して、7世紀末から8世紀前半にかけては、御駒堂遺跡・山ノ上遺跡のような関東からの移民によって成立したとみられる集落、8世紀前半から後半にかけては、原田・下萩沢遺跡のような古代栗原郡の設置と経営に関わって成立したとみられる集落など、成立の背景や性格を異にした、多様な性質を持つ集落が存在していたことが明らかとなっている。こうした中につけて、本遺跡は、8世紀の古代栗原郡の地に営まれていた集落の実態の一例を如実に示したものと言い得る。

### 3. まとめ

1. 大天馬遺跡は、栗原市志波姫堀口大天馬に所在し、一迫川によって形成された段丘上に立地している。調査地点の標高は、30 ~ 33m である。
2. 遺跡範囲は、東側では、栗原市の確認調査で検出された S I 1 竪穴住居跡までとみられるが、地形的な状況から、さらに東に延びる可能性がある。西側と南側は沢地形によって画された現道部分まで、北側は、急傾斜面となっており、A区の1トレンチからC区の北辺までが、おおよその範囲と捉えられる。
3. 発見された遺構は、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基、土坑6基、溝跡5条、ピット71個である。これらの遺構の年代は、S I 7 竪穴住居跡が8世紀前半、S I 6 竪穴住居跡が8世紀後半、S I 5 竪穴住居跡が8世紀代と考えられる。これ以外の遺構の詳細な時期については、不明である。
4. 竪穴住居跡は、方形、隅丸方形を呈し、煙道は、住居外に長く延びる。カマドの構築材には白色粘土を使用しており、このようなカマドを持った住居形態は、地域的な特徴を示したものである。S I 6・7 竪穴住居跡では、それぞれ北壁→東壁、北壁→北壁にカマドの造り替えが行われている。
5. 出土遺物には、非クロロ調整の土師器壺・塊・鉢・甕、関東系土師器壺、須恵器壺・甕、近世陶器、砥石、錢貨がある。このうち土師器には、8世紀前半～後半、須恵器には8世紀後半の年代が与えられる。
6. 竪穴住居跡によって構成される集落は、8世紀前半～後半に営まれていた在地の一般集落と捉え

られる。周辺一帯には、御駒堂遺跡、原田遺跡、下萩沢遺跡、山ノ上遺跡、木戸遺跡、佐内屋敷遺跡、大門遺跡といった当該期の多様な性格をもった集落が存在しており、古代栗原郡内における集落のあり方や相互の関連性、集落の移動・消長などについて、栗原郡の成立過程や伊治城とのつながりを踏まえ、今後更なる検討が必要なものと考えられる。

## 註

- 註 1 次橋窯跡出土須恵器坏の胎土中には、海綿骨針が含まれるのに対し、大天馬遺跡出土須恵器坏の胎土中には、海綿骨針が含まれない。
- 註 2 周辺の遺跡において、8世紀後半の住居でカマドを北壁から東壁に造り替えている例としては、原田遺跡 S I 30 住居跡、佐内屋敷遺跡第23号住居跡がある。また、9世紀初頭頃に時代は下るが、栗原市長者原遺跡（栗駒町教育委員会 1995）第27号・第43号住居跡で北壁のカマド造り替え、第2号住居跡で北壁から東壁へのカマドの造り替えが行われている。なお、カマドの位置と住居の出入り口とは正対していると判断されることから、大天馬遺跡の集落は南面していたものとみられる。
- 註 3 当該期の周辺遺跡において、栗原市糠塚遺跡第2号住居跡（8.1m × 8.3m（規模は東西×南北）・8世紀後半）・第21号住居跡（7.8m × 7.2m・8世紀後半）、第27号住居跡（8.7m × 7.2m・8世紀後半）、御駒堂遺跡第15号住居跡（7.7m × 7.6m・8世紀前半）、経ヶ崎遺跡S I 6 住居跡（9.6m × 9.6m・8世紀後半）・40b住居跡（10.0m × 10.0m?・8世紀後半）、原田遺跡S I 30 住居跡（7.0m × 7.2m・8世紀後半）、下萩沢遺跡S I O 6 C 住居跡（8.3m × 8.0m・8世紀後半）、栗原市有賀峰遺跡第1住居跡（宮城県教育委員会 1980g）（7.1m以上 × 8.3m・8世紀後半）などの大型住居が検出されている。集落内において居住者毎に居住占有面積の違いが存在していたことを窺わせる。
- 註 4 村田晃一氏によるカマド分類を参考とした（村田 2000、2004）。村田氏によるとこの時期のカマドは、カマド本体が住居内部にあり、長い煙道を持つもの（1類）が在地型、カマド本体が住居外部に突出し短い煙道を持つもの（2類）とカマド本体が住居外部に突出し長い煙道を持つもの（3類）が関東型に大別できるという。一方、当地域では、カマドの構築に白色粘土を使用する例が普遍的に存在する。この点については、住居の立地する地山が軟弱なソフトロームであった場合、地山の削り出しによるカマド本体部の構築や、表層の地山を構築土に用いることが不適当なため、構築材に適したより深層の良質な地山を採掘した結果が、白色粘土の使用に結び付いたものとみなした。したがって、ここでは住居に関東系土師器を伴わず、カマド本体を構築土のみで住居内に付設し、煙道が住居外に長く延びるタイプのカマドについて、在地型と捉えることとした。なお、白色粘土の使用については、時代的、地域的特性や、住居・集落の構造、民俗例などを含めたより詳細な分析が必要なものと考えられる。
- 註 5 山ノ上遺跡では、8世紀前葉の住居跡3軒、木戸遺跡では8世紀前葉の住居跡2軒、佐内屋敷遺跡では、8世紀前半の住居跡3軒、8世紀後半の住居跡3軒、大門遺跡では8世紀後半の住居跡1軒が検出されており、本遺跡と住居の分布状況に類似した傾向がみられる。山ノ上遺跡は移民集落、木戸遺跡、佐内屋敷遺跡、大門遺跡は在地集落と考えられる。周辺遺跡としてはこの他に、南西1.1kmの丘陵上に位置する源光遺跡（宮城県考古学会 2011）で8世紀末～9世紀前半の住居跡2軒が検出されており、御駒堂遺跡の立地する段丘の北東側に連なつて平安時代の集落である宇南遺跡（宮城県教育委員会 1980f）、鶴ノ丸遺跡（宮城県教育委員会 1981）が調査されている。この他、古代の集落としては淀遺跡（宮城県教育委員会 2001）、吹付遺跡（宮城県教育委員会 2005a）が存在しているが、確認調査に留まっているため実態は不明である。なお淀遺跡では、狐塚遺跡で焼成されたとみられる静止糸切りの須恵器坏が出土しており注目される。
- 註 6 『続日本紀』靈亀元年（715）5月庚戌（30）日条「移相模。上総。常陸。上野。武藏。下野六國富民千戸。配陸奥焉。」の記事との関連性が指摘し得るが、具体的に陸奥国のどの地域であったのか記事からは明らかにできない。また、靈亀元年当時、栗原郡は未だ建郡されていない（栗原郡の設置は神護景雲3年（769））ため、律令政府によって陸奥国外に対して行われた移民政策の一環として捉えることができよう。

## 引用・参考文献

- 吾妻俊典 2004 「多賀城とその周辺におけるロクロ土師器の普及開始年代」『宮城考古学』第6号 pp.187～196
- 伊東信雄 1957 「古代史」『宮城県史』第1巻 宮城県史編纂委員会
- 伊東信雄 1981 『宮城県史』34 史料集V 考古資料
- 今泉隆雄 2003 「多賀城創建に至る陸奥国の辺境経営」『第29回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』古代城柵官衙遺跡検討会 第29回実行委員会事務局
- 氏家和典 1981 「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
- 小葉田淳 1969 『日本貨幣流通史』 刀江書院
- 加藤道男 1989 「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢II』(芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会) pp.277～330
- 興野義一 1951 「迫川流域の石器時代文化」『仙台郷土研究』第18巻第3号 仙台郷土研究会
- 工藤雅樹 1989 『城柵と蝦夷』考古学ライブラリー51 ニュー・サイエンス社
- 熊谷公男 2004 『古代の蝦夷と城柵』歴史文化ライブラリー178 吉川弘文館
- 熊谷公男 2004 『蝦夷の地と古代国家』日本史リブレット 山川出版社
- 栗駒町教育委員会 1972 『鳥矢ヶ崎古墳群発掘調査概報』(栗駒町埋蔵文化財報告)
- 栗駒町教育委員会 1995 『長者原遺跡』(栗駒町文化財調査報告書第3集)
- 栗原市教育委員会 2006～2011 『伊治城跡』(栗原市文化財調査報告書第1、4、7、9、11、13集)
- 栗原市教育委員会 2006 『泉沢A遺跡』(栗原市文化財調査報告書第2集)
- 栗原市教育委員会 2008 『下萩沢遺跡』(栗原市文化財調査報告書第6集)
- 国士館大学考古学会編 2009 『古代社会と地域間交流—土師器からみた関東と東北の様相—』六一書房
- 古代城柵官衙遺跡検討会 1998 「東北地方の古代集落」第3分冊『第24回古代城柵官衙遺跡検討会 シンポジウム「城柵と地域社会の変容」資料集』
- 佐藤信行 1973 『築館町嘉倉貝塚調査概報—宮城県下に於ける最奥部の貝塚—』築館町史資料 築館町文化財保護委員会
- 静岡いづみ会 1998 『穴銭入門 寛永通寶』 書信館出版
- 志波姫町教育委員会 2005 『御駒堂遺跡』(志波姫町文化財調査報告書第1集)
- 志波姫町史編纂委員会 1976 『志波姫町史』
- 瀬峰町教育委員会 1983 『大境山遺跡』(瀬峰町文化財調査報告書第4集)
- 瀬峰町教育委員会 1988 『下藤沢II遺跡』(瀬峰町文化財調査報告書第6集)
- 瀬峰町教育委員会 2000 『桃生田前遺跡・下富前遺跡』(瀬峰町文化財調査報告書第19集)
- 瀬峰町教育委員会 2003 『長根遺跡』(瀬峰町文化財調査報告書第21集)
- 瀬峰町教育委員会 2004 『下富前遺跡』(瀬峰町文化財調査報告書第23集)
- 高清水町教育委員会 2000 『経ヶ崎遺跡・観音沢遺跡』(高清水町文化財調査報告書第2集)
- 瀧澤武雄 1996 『日本の貨幣の歴史』 吉川弘文館
- 田尻町教育委員会 1998 『新田柵跡推定地』田尻町文化財調査報告書第3集
- 谷巧二 2002 『寛永通寶錢譜(上・下)』
- 辻秀人ほか 2007 『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書
- 築館町教育委員会 1988～2001、2004、2005 『伊治城跡』(築館町文化財調査報告書第1～14、17、19集)
- 築館町教育委員会 2002 『伊治城跡・嘉倉貝塚』(築館町文化財調査報告書第15集)
- 築館町教育委員会 2003 『嘉倉貝塚』(築館町文化財調査報告書第16集)
- 築館町教育委員会 2005 『鰐沢遺跡』(築館町文化財調査報告書第18集)
- 築館町史編纂委員会 1976 『築館町史』
- 東北学院大学考古学研究部 1972 「鳥矢ヶ崎古墳群発掘調査概報」『温故』第7号
- 東北古代土器研究会福島・宮城支部 2005 『東北古代土器集成—古墳後期～奈良・集落編一〈宮城〉』研究報告2
- 東北古代土器研究会福島・宮城支部 2008 『東北古代土器集成—須恵器・窯跡編一〈陸奥〉』研究報告3

- 日本貨幣商協同組合編 2011 『日本貨幣カタログ 2012』
- 日本貨幣商協同組合編 2010 『日本の貨幣』
- 古川市教育委員会 2000 『名生館官衙遺跡XX』(古川市文化財調査報告書第27集)
- 松山町教育委員会 1983 『次橋須恵器窯跡発掘調査報告』(松山町文化財調査報告書第1集)
- 宮城県教育委員会 1978 『糠塚遺跡』(宮城県文化財発掘調査略報(昭和52年度分))(宮城県文化財調査報告書第53集)
- 宮城県教育委員会 1979 『宇南遺跡』(宮城県文化財調査報告書第59集)
- 宮城県教育委員会 1980a 「大門遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書II』(宮城県文化財調査報告書第62集)
- 宮城県教育委員会 1980b 「原田遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書II』(宮城県文化財調査報告書第63集)
- 宮城県教育委員会 1980c 「佐野遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書II』(宮城県文化財調査報告書第63集)
- 宮城県教育委員会 1980d 「木戸遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書III』(宮城県文化財調査報告書第69集)
- 宮城県教育委員会 1980e 「山ノ上遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書III』(宮城県文化財調査報告書第69集)
- 宮城県教育委員会 1980f 「宇南遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書III』(宮城県文化財調査報告書第69集)
- 宮城県教育委員会 1980g 「有賀峰遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書III』(宮城県文化財調査報告書第69集)
- 宮城県教育委員会 1980h 「観音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書IV』(宮城県文化財調査報告書第72集)
- 宮城県教育委員会 1981 「鶴ノ丸遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書V』(宮城県文化財調査報告書第81集)
- 宮城県教育委員会 1982 「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書VI』(宮城県文化財調査報告書第83集)
- 宮城県教育委員会 1983 「佐内屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書VII』(宮城県文化財調査報告書第93集)
- 宮城県教育委員会 1987 「硯沢・大沢窯跡ほか」(宮城県文化財調査報告書第116集)
- 宮城県教育委員会 1991 「大嶺八幡遺跡・八幡遺跡」『合戦原遺跡ほか』(宮城県文化財調査報告書第140集)
- 宮城県教育委員会 1992 「金鑄神遺跡ほか」(宮城県文化財調査報告書第150集)
- 宮城県教育委員会 1996 「栗原寺跡」『下草古城跡ほか』(宮城県文化財調査報告書第169集)
- 宮城県教育委員会 1998 『宮城県遺跡地図』(宮城県文化財調査報告書第176集)
- 宮城県教育委員会 1999 『一里塚遺跡』(宮城県文化財調査報告書第179集)
- 宮城県教育委員会 2001 「淀遺跡」『名生館遺跡ほか』(宮城県文化財調査報告書第187集)
- 宮城県教育委員会 2002 『嘉倉貝塚』(宮城県文化財調査報告書第192集)
- 宮城県教育委員会 2005a 「吹付遺跡」『壇の越遺跡ほか』(宮城県文化財調査報告書第202集)
- 宮城県教育委員会 2005b 「下萩沢遺跡・原田遺跡の調査成果の概要」『第31回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
- 宮城県教育委員会 2009 『原田遺跡・下萩沢遺跡』(宮城県文化財調査報告書第219集)
- 宮城県考古学会 2011 『宮城県遺跡調査成果発表会 発表要旨』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1978～1980 『伊治城跡I～III』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第3～5冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1983 『名生館官衙遺跡III』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第8冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1992 『東山遺跡VI』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第17冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1998 『桃生城跡VI』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第23冊
- 村田晃一 2000 「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺—移民の時代—」『宮城考古学』第2号 pp.45～80
- 村田晃一 2002 「7世紀集落研究の視点」『宮城考古学』第4号 pp.49～71
- 村田晃一 2004 「三重構造城柵論—伊治城の基本的な整理を中心として 移民の時代2—」『宮城考古学』第6号  
pp.159～186
- 村田晃一 2005 「7・8世紀における陸奥北辺の様相—宮城県域を中心として—」『日本考古学協会2005年度福島大会  
シンポジウム資料集』
- 八木光則 1996 「東北北部の終末期古墳群」『岩手考古学』第8号 pp.61～80
- 八木光則 1998 「陸奥における土師器の地域性」『岩手考古学』第10号
- 山中敏史 1994 『古代地方官衙遺跡の研究』 塙書房
- 矢本町教育委員会 1991 『小松遺跡・赤井遺跡』矢本町文化財調査報告書第2集

# 写 真 図 版





調査区空撮(南から)



調査区空撮(北から)

図版1 調査区空撮(1)



調査区空撮(北西から)



調査区空撮(東から)

#### 図版2 調査区空撮(2)



A区全景(北から)



C区俯瞰全景



C区全景(西から)

図版3 A区・C区全景



C区全景(北東から)



SI5竪穴住居跡全景(南西から)



SI5竪穴住居跡P1北西主柱穴断面(西から)



SI5竪穴住居跡掘方完掘全景(南西から)

図版4 C区全景・SI5竪穴住居跡



SI6竪穴住居跡空撮全景



SI6竪穴住居跡全景(西から)



SI6竪穴住居跡新カマド全景(西から)



SI6竪穴住居跡新カマド土師器甕出土状況(西から)

図版5 SI6竪穴住居跡(1)



SI6竪穴住居跡旧カマド煙道全景(南から)



SI6竪穴住居跡旧カマド煙出しピット土師器甕出土状況(南から)



SI6竪穴住居跡P3南西主柱穴断面(西から)

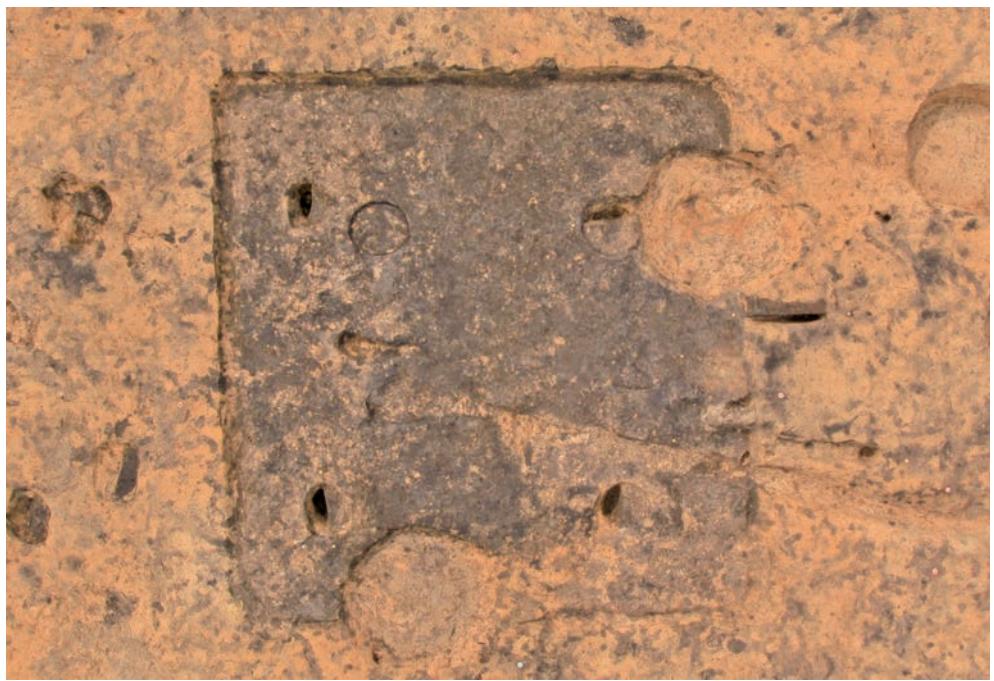


SI6竪穴住居跡P4北西主柱穴断面(西から)



SI6竪穴住居跡掘方  
完掘全景(西から)

図版6 SI6竪穴住居跡(2)



SI7 竪穴住居跡空撮全景



SI7 竪穴住居跡全景(南から)



SI7 竪穴住居跡新カマド全景(南から)



SI7 竪穴住居跡旧カマド煙道断面(東から)

図版7 SI7 竪穴住居跡(1)



SI7 竪穴住居跡K1貯蔵穴断面(西から)



SI7 竪穴住居跡P2南東主柱穴断面(南から)



SI7 竪穴住居跡P3南西主柱穴断面(南から)



SI7 竪穴住居跡P4北西主柱穴断面(西から)



SI7 竪穴住居跡掘方  
完掘全景(南から)

図版8 SI7 竪穴住居跡(2)



SB8掘立柱建物跡P11柱穴断面(南から)



SB8掘立柱建物跡P12柱穴断面(南から)



SB8掘立柱建物跡P13柱穴断面(南から)



SB8掘立柱建物跡P16柱穴断面(南から)

図版9 SB8掘立柱建物跡



SE3井戸跡全景(西から)



SK4土坑全景(西から)



SK12土坑全景(南から)

図版10 SE3井戸跡・SK4・12土坑



SK13土坑断面(南から)



SK14土坑全景(南から)



SK15・16土坑全景(南から)

図版11 SK13・14・15・16土坑



SD1溝跡全景(南西から)



SD2溝跡全景(南西から)

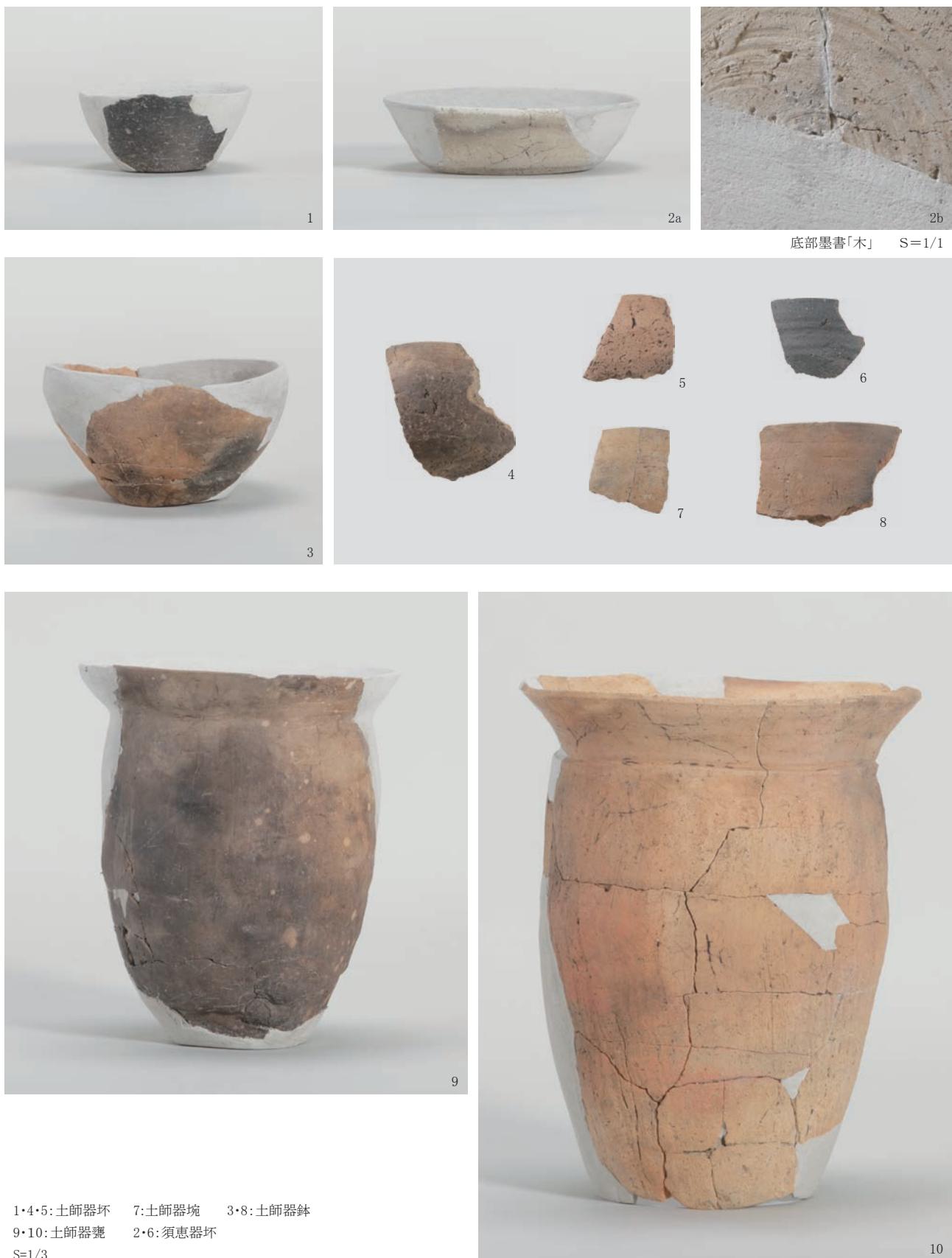


SD9溝跡全景(北から)

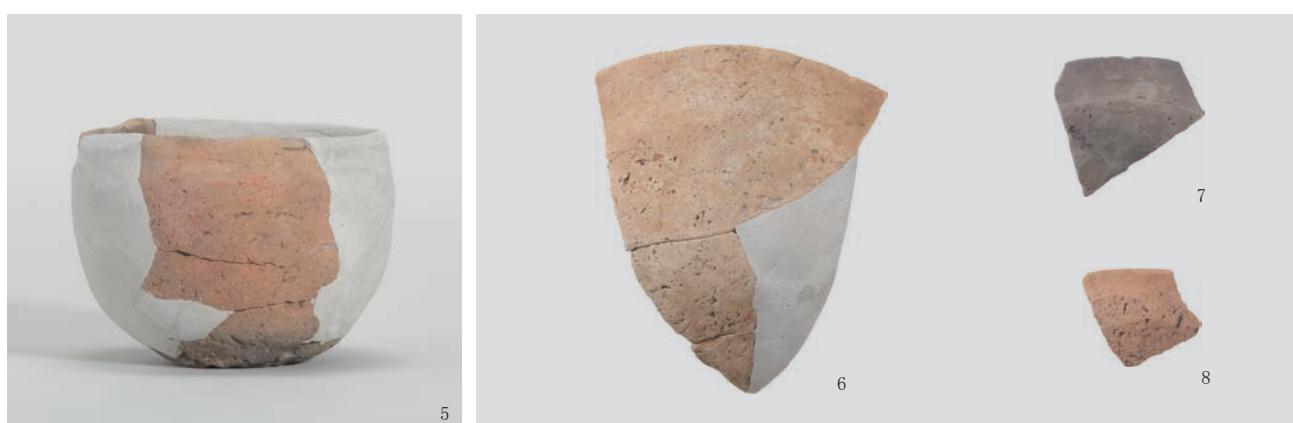


SD10・11溝跡全景(北から)

図版12 SD1・2・9・10・11溝跡



図版13 SI6竪穴住居跡出土土器



1~3:土師器甕 4:須惠器甕 5·6:土師器鉢 7·8:土師器坏  
9:砥石  
1~4·9:SI6竪穴住居跡 5·6:SI7竪穴住居跡  
7·8:SK15土坑  
1~8: S=1/3 9: S=1/2

図版14 SI6・7竪穴住居跡 SK15土坑出土土器・石製品

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	だいてんまいせき							
書名	大天馬遺跡							
副書名	一般国道4号築館バイパス関連遺跡調査報告書II							
巻次								
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第231集							
編著者名	豊村幸宏							
編集機関	宮城県教育委員会							
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3-8-1 TEL 022-211-3684							
発行年月日	西暦2012年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
だいてん ま い せき 大天馬遺跡	みや ぎ けんくりはら し し わひめ 宮城県栗原市志波姫 ほりぐちだいてん ま 堀口大天馬	045292	49023	38度 45分 11秒	141度 03分 13秒	2009.5.25 ~6.3 2011.7.19 ~10.11	4,900m <sup>2</sup>	一般国道4号築館バイパス建設工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
大天馬遺跡	散布地	奈良	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・溝跡・ピット	土師器・須恵器・近世陶器・砥石・錢貨	8世紀前半～後半の竪穴住居跡を検出			
要約	大天馬遺跡は、一迫川の段丘上に立地する奈良時代の遺跡である。一般国道4号築館バイパス建設工事に伴い発掘調査を実施した。調査の結果、8世紀前半～後半の竪穴住居跡が3軒検出され、住居跡から土師器壺・塊・鉢・甕、須恵器壺・甕、砥石が出土した。竪穴住居跡の方向は、真北を基準とするものと、やや西に振れるものがある。カマドは、北壁→北壁、北壁→東壁の造り替えがなされ、カマド本体の構築には、いずれも白色粘土を用いている。これらの住居の構造やその分布状況から、本遺跡の性格は、当地域の在地集落の特徴を示したものと言える。なお、平成21年度に栗原市が今回の調査地点の東側で実施した調査では、奈良時代の竪穴住居跡が3軒確認されており、集落の範囲が東に広がっていることが明らかにされた。検出遺構にはこの他、時期不明の掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝跡、ピットがある。							

---

---

宮城県文化財調査報告書第231集

## 大天馬遺跡

平成24年3月19日印刷  
平成24年3月26日発行

発行 宮城県教育委員会  
仙台市青葉区本町三丁目8番1号

---

---